
鴻 巣 市

安養寺古墳群

主要地方道鴻巣羽生線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 9

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 調査区全景（合成写真）



2 遺跡遠景（北東から南西）



1 調査区北東側遠景



2 調査区南西側遠景



1 調査区南西側全景



2 第1号方形周溝墓出土遺物



1 第1号方形周溝墓出土土器(第12图1)



2 第1号方形周溝墓出土土器(第12图3)



3 第1号方形周溝墓出土土器(第13图8)



4 第1号方形周溝墓出土鉄剣(第11图1)

安養寺古墳群の紹介

安養寺古墳群は、J R 高崎線鴻巣駅の北約 2 km に位置し、大宮台地の東側を南流する元荒川左岸の台地に立地しています。

本古墳群は、主要地方道鴻巣羽生線建設事業に伴って調査され、古墳時代（約 1,700 年前）の方形周溝墓や円形周溝墓が発見されました。方形周溝墓からは埋葬施設が発見され、鉄剣とガラス小玉が副葬されていました。また、周溝からは多くの土器も発見されました。大型の壺が周溝の四隅に規則的に配置され、底部に穴をあけた小型の壺もみつかりました。

序

埼玉県では、「誰もが安心して暮らせる安心・安全 埼玉」を目指し、ひとつひとつが活発に交流できる交通環境の整備に努めております。インターチェンジへのアクセス道路、道路網の骨格となる幹線道路の整備は、活力ある地域形成のために必要不可欠の課題です。主要地方道鴻巣羽生線は、このような地域の自立性と競争力を高める道路整備の一環として計画されました。

今回、鴻巣市安養寺地内にバイパス道路が建設されることとなり、その事業地内に所在する安養寺古墳群の取り扱いについて、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代前期の方形周溝墓が発見されました。そのうちの一基からは主体部（埋葬施設）がみつきり、鉄剣とガラス小玉が副葬されていました。また、墓を区画する溝からは供献された壺が発見されるなど、さきたま古墳群成立の前史を語るうえで、欠くことのできない貴重な成果を挙げることができました。

本書はこれら発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、北本県土整備事務所、鴻巣市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、鴻巣市安養寺に所在する安養寺古墳群第1・2次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
安養寺古墳群（A N Y J）
埼玉県鴻巣市安養寺字西裏322-3 他
発掘調査届に対する指示通知：
平成20年2月6日付け教生文第2-60号
3. 発掘調査は、主要地方道鴻巣羽生線建設事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。
第1次調査は、平成20年1月28日から平成20年3月28日まで、飼持和夫・植田雄己が担当し実施した。
第2次調査は、平成20年4月8日から平成20年4月30日まで、鈴木孝之・植田雄己が担当して実施した。
整理・報告書作成事業は、平成20年12月1日から平成20年12月26日まで村田健二が、平成21年1月5日から平成21年3月31日まで山本禎が担当して実施し、平成21年3月末に事業団報告書第362集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は、株式会社ビッソ測量設計に、空中写真撮影は平成20年3月と4月に精進測量株式会社に委託した。
巻頭の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は富田和夫が行った。
7. 出土品の整理・図版作成は、村田・山本が行い、瀧瀬芳之・鈴木孝之・西井幸雄・上野真由美の協力を得た。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、IV-6-1(1)は上野、V-3は福田聖、V-4は鈴木孝之が行い、その他は山本が行った。
9. 本書の編集は、山本が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成21年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査、本書の作成に当たり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
鴻巣市教育委員会 山崎武

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図内に記した方位はすべて座標北を示す。

D-6 グリッド北西杭の座標は、世界測地系でX=842000m、Y=-2855000m。北緯36° 04′ 32″、東経139° 30′ 59″である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく、10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、西から東方向にアルファベット（A・B・C…）、北から南方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせ、C-3グリッド等と呼称した。

4. 本書の本文・挿図・表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S R 方形周溝墓・円形周溝墓
S D 溝跡 S E 井戸跡
S K 土壌 P ピット

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構図

方形周溝墓・円形周溝墓 1：100
井戸跡・土壌・ピット 1：60
溝跡 1：100 溝断面 1：50

遺物実測図

土器 1：4 石器・拓影図 1：3
金属製品 1：2

6. 実測図中の表記方法は以下のとおりである。

赤彩された土器はその範囲に10%の網をかけて示した。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を示す。

8. 遺物観察表については以下のとおりである。

・口径・器高・底径はcmを単位とする。

・（ ）内の数値は口径・底径は復元推定値を示し、器高は遺存高を示す。

・胎土は肉眼で観察できるものを示した。

雲：雲母 片：片岩 角：角閃石 長：長石
石：石英 軽：軽石 砂：砂粒子 赤：赤色粒子 白：白色粒子 針：白色針状物質 黒：黒色粒子 礫：小礫

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・土器の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠った。

・残存は残存率を指し、残存率は図示した器形の部分に対する割合を示した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、鴻巣市発行1/2,500の地形図を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	4. 溝跡	35
1. 発掘調査に至る経過	1	5. ビット	44
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	6. グリッド出土遺物	52
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(1) 縄文時代	52
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 古墳時代、中・近世以降	54
1. 地理的環境	4	V 調査のまとめ	56
2. 歴史的環境	5	1. 安養寺古墳群の調査成果	56
III 遺跡の概要	8	2. 安養寺古墳群の位置付け	57
IV 遺構と遺物	13	3. 方形周溝墓について	60
1. 周溝墓	13	4. 中近世	64
2. 井戸跡	28		
3. 土壌	29		

写真図版

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	4	第20図	第3号円形周溝墓	26
第2図	周辺の遺跡	6	第21図	第5号円形周溝墓	27
第3図	遺跡周辺の地形	9	第22図	第1～3号井戸跡	28
第4図	調査区全体図(1)	10	第23図	第2号井戸跡出土遺物	29
第5図	調査区南西側全体図(2)	11	第24図	土壌(1)	30
第6図	調査区北東側全体図(3)	12	第25図	土壌(2)	32
第7図	第1号方形周溝墓(1)	13	第26図	土壌(3)	33
第8図	第1号方形周溝墓(2)	14	第27図	土壌出土遺物	34
第9図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(1)	15	第28図	第1号溝跡	36
			第29図	溝跡(1)	37
第10図	第1号方形周溝墓遺物出土状況(2)	16	第30図	溝跡(2)	38
			第31図	溝跡(3)	39
第11図	第1号方形周溝墓主体部・出土遺物	17	第32図	溝跡(4)	40
			第33図	溝跡(5)	41
第12図	第1号方形周溝墓出土遺物(1)	18	第34図	溝跡(6)	42
			第35図	溝跡出土遺物	43
第13図	第1号方形周溝墓出土遺物(2)	19	第36図	ピット(1)	46
			第37図	ピット(2)	48
第14図	第1号方形周溝墓出土遺物(3)	20	第38図	ピット(3)	51
			第39図	グリッド出土遺物(1)	53
第15図	第2号方形周溝墓	22	第40図	グリッド出土遺物(2)	55
第16図	第2号方形周溝墓出土遺物	23	第41図	周溝墓配置図	59
第17図	第4号方形周溝墓	24	第42図	ローム櫛、鉄剣の類例	61
第18図	第4号方形周溝墓遺物出土状況	25	第43図	安養寺古墳群の土器配置と出土土器	62
					62
第19図	第4号方形周溝墓出土遺物	25	第44図	中近世遺構分布図	65

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	7	第8表	土壌出土輪観察表	34
第2表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	21	第9表	土壌出土遺物観察表	35
第3表	第2号方形周溝墓出土遺物観察表	23	第10表	溝跡出土輪観察表	44
第4表	第2号方形周溝墓出土輪観察表	23	第11表	溝跡出土遺物観察表	44
第5表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表	24	第12表	グリッド出土遺物観察表	54
第6表	第4号方形周溝墓出土輪観察表	24	第13表	グリッド出土輪観察表	54
第7表	第2号井戸跡出土遺物観察表	29			

写真図版目次

- | | | | |
|------|--|-------|--------------------------------|
| 図版 1 | 1 調査区南西側全景 | 図版 8 | 1 第1号方形周溝墓北東溝南東部壺(4)出土状況(1) |
| | 2 調査区北東側全景 | | 2 第1号方形周溝墓北東溝南東部壺(4)出土状況(2) |
| | 3 第1・2号方形周溝墓全景 | | 3 第1号方形周溝墓北東溝中央部壺(12)出土状況 |
| 図版 2 | 1 第1号方形周溝墓 | 図版 9 | 1 第1号方形周溝墓北東溝中央部ミニチュア壺(10)出土状況 |
| | 2 第1号方形周溝墓南東溝 | | 2 第1号方形周溝墓北東溝北西部甕(13・14)出土状況 |
| | 3 第1号方形周溝墓北西溝 | | 3 第1号方形周溝墓北西溝北東部壺(15)出土状況 |
| 図版 3 | 1 第1号方形周溝墓南西溝 | 図版 10 | 1 第2号方形周溝墓 |
| | 2 第1号方形周溝墓北東溝 | | 2 第3号円形周溝墓 |
| | 3 第1号方形周溝墓主体部掘り方 | | 3 第4号方形周溝墓 |
| 図版 4 | 1 第1号方形周溝墓主体部確認状況 | 図版 11 | 1 第4号方形周溝墓北東コーナー遺物出土状況 |
| | 2 第1号方形周溝墓主体部鉄剣出土状況(1) | | 2 第5号円形周溝墓 |
| | 3 第1号方形周溝墓主体部鉄剣出土状況(2) | | 3 第2号井戸跡遺物出土状況 |
| 図版 5 | 1 第1号方形周溝墓西コーナー壺(1)出土状況 | 図版 12 | 1 第1号土壇 |
| | 2 第1号方形周溝墓南東溝中央壺(3)出土状況 | | 2 第2号土壇 |
| | 3 第1号方形周溝墓南コーナー壺(8)出土状況 | | 3 第15号土壇 |
| 図版 6 | 1 第1号方形周溝墓南西溝南東部壺(9)出土状況 | 図版 13 | 1 第1号溝跡 |
| | 2 第1号方形周溝墓南東溝中央壺(7)出土状況(1) | | 2 第4号溝跡 |
| | 3 第1号方形周溝墓南東溝中央壺(7)出土状況(2) | | 3 第15号溝跡 |
| 図版 7 | 1 第1号方形周溝墓北東溝南東部遺物出土状況 | 図版 14 | 1 第1号方形周溝墓(第12図1) |
| | 2 第1号方形周溝墓北西溝南東部高坏(5)・ミニチュア鉢(6)出土状況(1) | | 2 同左 口縁部 |
| | 3 第1号方形周溝墓北西溝南東部高坏(5)・ミニチュア鉢(6)出土状況(2) | | 3 同左 口縁部 |
| | | | 4 第1号方形周溝墓(第13図8) |
| | | | 5 同左 胴部籠目痕 |
| | | | 6 同左 底部 |
| | | 図版 15 | 1 第1号方形周溝墓(第12図4) |
| | | | 2 第1号方形周溝墓(第12図2) |
| | | | 3 同上 底部 |

- | | | | | | |
|------|---|--------------------------|------|---|-----------------------|
| | 4 | 第1号方形周溝墓(第14図15) | | 5 | 同上 底部 |
| | 5 | 同左 底部 | 図版19 | 1 | 第4号方形周溝墓
(第19図) |
| 図版16 | 1 | 第1号方形周溝墓(第12図3) | | 2 | 第4号方形周溝墓
(第19図) |
| | 2 | 同左 口縁部 | | 3 | 第2号井戸跡(第23図2) |
| | 3 | 同左 底部 | | 4 | 同下 内面 |
| | 4 | 第1号方形周溝墓(第12図7) | | 5 | 第2号井戸跡(第23図3) |
| | 5 | 同上 底部 | 図版20 | 1 | 第2号井戸跡(第23図1) |
| | 6 | 第1号方形周溝墓(第13図9) | | 2 | 第11号土壙(第27図5) |
| | 7 | 同上 底部 | | 3 | 同下 内面 |
| 図版17 | 1 | 第1号方形周溝墓(第12図5) | | 4 | 第11号土壙(第27図4) |
| | 2 | 第1号方形周溝墓(第12図6) | | 5 | 溝跡出土埴輪(第35図) |
| | 3 | 第1号方形周溝墓(第13図10) | 図版21 | 1 | D-5グリッド(第40図5) |
| | 4 | 第1号方形周溝墓(第13図11) | | 2 | 同上 内面 |
| | 5 | 第1号方形周溝墓(第13図12) | | 3 | D-5グリッド(第40図3) |
| | 6 | 第1号方形周溝墓(第13図13) | | 4 | D-5グリッド(第40図4) |
| 図版18 | 1 | 第1号方形周溝墓 鉄剣
(第11図1) | | 5 | グリッド出土遺物(1)
(第40図) |
| | 2 | 第1号方形周溝墓 ガラス小玉
(第14図) | 図版22 | 1 | グリッド出土遺物(2)(第39図) |
| | 3 | 第1号方形周溝墓 鉄製品
(第14図) | | 2 | グリッド出土遺物(3)(第39図) |
| | 4 | 第4号方形周溝墓(第19図1) | | | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、円滑な道路交通を実現させるため、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を推進している。本報告書に係る主要地方道鴻巣羽生線は、既存路線の円滑な交通と安心安全な道路空間を形成するためのバイパス建設及び歩道整備として計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該道路事業に先立ち、道路街路課長から平成17年1月5日付け道街655-1号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、生涯学習文化財課長あて照会があった。

それに対して生涯学習文化財課は、平成19年11月26日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成19年11月27日付け教生文第1876-1号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称 (NO)	種別	時代	所在地
安養寺古墳群 (13-062)	古墳群	縄文・古墳・鎌倉	鴻巣市大字安養寺字西裏、字中宿

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着工に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱い

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

同「工事に着手して差し支えない区域」については、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課と協議してください。

道路街路課と生涯学習文化財課・鴻巣市教育委員会は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路街路課・生涯学習文化財課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第94条1項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同条2項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、第92条1項の規定による発掘調査届が(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成20年2月8日付け教文第3-976号

発掘調査届に対する指示通知：

平成20年2月6日付け教生文第2-60号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

安養寺古墳群の発掘調査は平成20年1月28日から平成20年4月30日まで実施した。

調査区外への掘削排土運搬ができないため、調査区を2分割して調査を行った。

1月末に事務手続きと事務所設置を行い、調査区の南西半部を重機による表土掘削に着手した。遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業、基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ・土層断面図・平面図などの作成・遺構写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

3月中頃に南西半部の調査を終了し、空中写真撮影を行った。下旬には調査区北東半部からの排土運搬と重機による表土掘削に着手した。遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業・基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ・土層断面図・平面図などの作成・遺構写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

4月下旬に、遺構の調査をほぼ終了し、調査区全景写真及び空中写真撮影を実施し、調査を終了した。

その後、事務所の撤去及び調査区の埋戻し、事務手続きを行い4月末に本事業に伴うすべての調査を完了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成20年12月1日から平成21年3月31日までの4ヶ月間にわたって実施した。

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺構から順次、遺物実測を開始した。土師器等は機械実測（3スペース等）を利用して素図を作成し、その素図をもとに実測図を完成させた。実測図・断面図は製図ペンで墨入れ（トレース）し、必要に応じて拓影を採った。実測図・断面図と拓影図を組み合わせてレイアウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図面は図面整理と修正を経て、第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでコンピュータに取り込んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレースし、スクリーン・諸記号・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、写真撮影を実施した。また、調査時に撮影した写真を選択し、遺物写真とともにパソコン内で編集を行い、写真図版を作成した。

作成したデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。編集作業を2月末にほぼ完了させ、印刷業者を選定し入稿した。校正は3回を行い、平成21年3月末に報告書を刊行した。

図面類・写真類・遺物は整理分類し、収納作業を実施した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理事 長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部 長	村田 健二
総務部		調査部 副部長	磯崎 一
総務部 副部長	昼間 孝志	主幹兼企画課長	劍持 和夫
総務 課長	松盛 孝	調査第一課主事	植田 雄己

平成20年度（発掘調査）

理事 長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部 長	村田 健二
総務部		調査部 副部長	磯崎 一
総務部 副部長	昼間 孝志	調査第二課長	細田 勝
総務 課長	松盛 孝	整理第一課主査	鈴木 孝之
		調査第一課主事	植田 雄己

平成20年度（報告書作成）

理事 長	刈部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元 信隆	調査部 長	村田 健二
総務部		調査部 副部長	磯崎 一
総務部 副部長	昼間 孝志	整理第二課長	富田 和夫
総務 課長	松盛 孝	主 査	山本 禎

II 遺跡の立地と環境

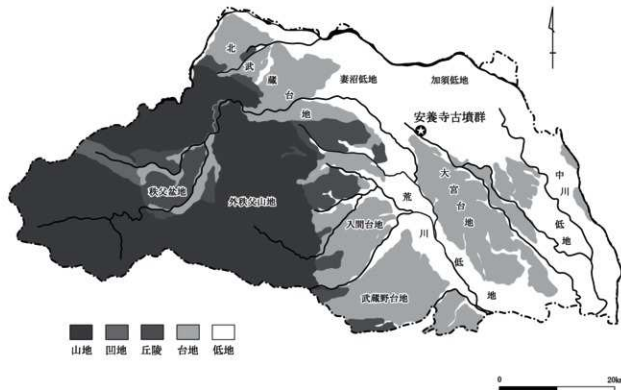
1. 地理的環境

安養寺古墳群は、鴻巣市安養寺に所在する。J R高崎線鴻巣駅の北約2kmの元荒川左岸に位置し、自然堤防と台地に立地している。

鴻巣市は埼玉県中央部よりやや東に位置し、行政区では東は北埼玉郡騎西町、南埼玉郡葛蒲町、西は熊谷市、荒川を境として比企郡吉見町、南は北本市、北は行田市に接している。市のほぼ中央には旧中仙道を挟んでJ R高崎線と国道17号が縦断し、東部の低地部を上越新幹線が通過している。

遺跡は大宮台地が北西方向に半島状に突き出した位置に所在し、東側を元荒川、西側を荒川が南流し、加須低地、荒川低地と呼ばれる肥沃な沖積

低地を形成している。大宮台地の台地西縁部は、荒川低地と8mの比高差を測り急峻であるが、その崖線も北に行くにつれて低くなり、鴻巣市箕田付近で洪積台地は河川の堆積土によって埋没し、自然堤防状の微高地となっている。また、台地西縁部は荒川低地に向かって、多くの小支谷が発達しているのに対し、東縁部は比較的穏やかに低地部へ移行し、台地部と低地部との境界は不明瞭となる。このような地理的条件から、遺跡の分布は荒川と元荒川の台地縁辺部に沿って数多く分布している。また、元荒川には自然堤防が帯状に発達し、従来は遺跡の分布が知られなかった自然堤防上にも、遺跡の存在が確認されている。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

旧石器時代は、荒川左岸に宮前遺跡(4)・城山遺跡(7)・赤台遺跡(12)があり、宮前遺跡・城山遺跡からはナイフ形石器1点のみであるが、赤台遺跡からはナイフ形石器4点と尖頭器が検出された。元荒川右岸には新屋敷遺跡(15)・生出塚遺跡(16)・埋没台地上の中三谷遺跡(18)があり、生出塚遺跡からはナイフ形石器1点であるが、新屋敷遺跡からは、ナイフ形石器・尖頭器・大型剥片が検出され、中三谷遺跡では武蔵野台地第Ⅳ期下層に対比される層からナイフ形石器・搔器・削器・石核・磨石が出土している。

縄文時代早期には、馬室小校庭内遺跡(10)から前半の燃糸文系土器と後半の条痕文土器が出土し、他に赤台遺跡・城山遺跡・登戸新田北遺跡(5)・権現遺跡(11)から条痕系土器が出土し、中三谷遺跡からは押型文土器が出土している。

前期では、城山遺跡からは諸磯期の土器が出土し、前半では赤台遺跡・二本木遺跡で僅かに出土しているのみである。

中期では大間原遺跡(9)・馬室小校庭内遺跡・赤台遺跡では住居跡が検出され、その他に城山遺跡などがある。

後・晩期には埋没台地上の中三谷遺跡で住居跡・土壌が検出され、その他に台地部の権現遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は少なく、登戸新田遺跡(6)で方形周溝墓が調査され、網目状燃糸文を施した壺形土器と吉ヶ谷式の壺が伴件しているが、九右衛門遺跡(2)・宮前本田遺跡(3)・宮地三丁目遺跡(17)では土器が出土したのみである。

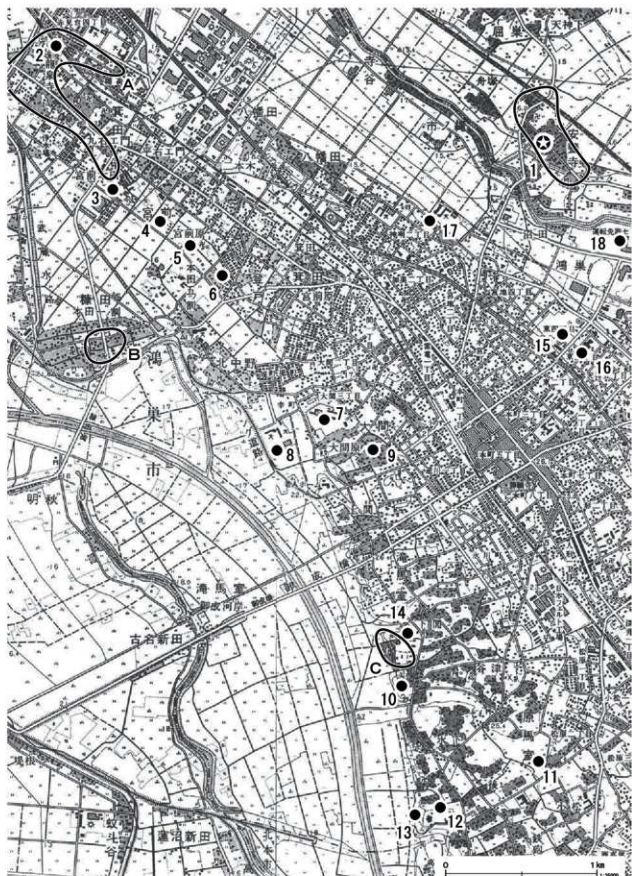
古墳時代前期の遺跡は、大間原遺跡・馬室小校庭内遺跡・下間遺跡(14)で数軒の住居跡が検出されている。新屋敷遺跡・赤台遺跡・中三谷遺跡とともに前期から後期に亘る集落で、赤台遺跡では集落と方形周溝墓があり、中三谷遺跡では後期になると集落は拡大する。その他には、宮前本田遺

跡は前期と後期の集落である。

中期の遺跡は、生出塚遺跡と前期から続く赤台遺跡・中三谷遺跡の集落跡と、富士山遺跡では土器が採取されている。

後期には、生出塚遺跡・赤台遺跡・中三谷遺跡と大集落である新屋敷遺跡が継続している。元荒川の低地を臨む大宮台地東側斜面にある生出塚遺跡の埴輪窯跡群では、埴輪窯跡40基・工房跡2基・粘土採掘坑1カ所が検出され円筒埴輪・形象埴輪が6世紀後半を中心として生産されている。荒川に面した大宮台地西縁の馬室埴輪窯跡群(13)は円筒埴輪を中心として、後期初頭からの6世紀代の生産とされる。

古墳群については、箕田古墳群(A)は五つの支群に分かれ、埴輪を伴う古墳と伴わない古墳があり、石室構築材にも角閃石安山岩を用いた古墳と凝灰岩質砂岩を用いた古墳とがある。5世紀後葉に出現し、中心を6～7世紀前葉におく古墳群である。翻田古墳群(B)は荒川の形成した自然堤防上に立地し、古墳は消滅しているが埴輪が採取されていることから古墳群と推定されている。新屋敷遺跡は1基の帆立貝式前方後円墳と76基の円墳が調査され5世紀後半に出現し、6世紀前半を中心に形成された古墳群である。生出塚古墳群は16基の円墳が検出され窯跡と同じく6世紀初頭から7世紀にかけて形成された。安養寺古墳群(1)は沖積低地に面する台地と自然堤防上に南北に広がる。北側には愛宕神社古墳や安養寺南古墳があり、古墳群の南端には八幡神社古墳があり、いずれの古墳からも埴輪片が採取されている。後期の馬室古墳群(C)は荒川に面する台地上に南北に伸びる3支群から成る古墳群で、砂岩の切石を用いた横穴式石室が多い。馬室支群の馬室小校庭内古墳からは副葬品と見られる勾玉・管玉・切子玉や直刀・鐔などを出土し、氷川神社境内からは瑪瑙製勾玉・銅釧・銀環・直刀・刀装具などが出



第2図 周辺の遺跡

土したとされ、古い様相を示す。九右衛門遺跡では円筒埴輪が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡は、宮前本田遺跡・赤台遺跡・中三谷遺跡・新屋敷遺跡・宮地三丁目遺跡がある。宮前本田遺跡では奈良時代の住居跡を検出し、赤台遺跡は奈良・平安時代の集落で、新屋敷遺跡は元荒川流域でも傑出した平安時代の大集落である。

他に荒川左岸には、源経基の居館の伝承を持つ伝源経基館跡(8)があり、土塁と堀が残っている。伝承のとおり平安時代末期に存立したものは明確ではない。

中・近世の遺跡は、九右衛門遺跡・富士山遺跡・宮前本田遺跡・登戸新田北遺跡・馬室小校庭内遺跡・赤台遺跡・新屋敷遺跡・生出塚遺跡・宮地三丁目遺跡・中三谷遺跡で当該期の遺構・遺物

が検出されている。中三谷遺跡ではコの字状の溝は北辺が107mを測り、コの字状区画内に溝跡・井戸跡・土壇・ピットが集中する。常滑産の陶器を主体に渥美や在地系瓦質土器の他僅かながら舶載陶磁器も出土し13世紀代に比定される。宮前本田北遺跡では鎌倉時代の和鏡が採取されている。新屋敷遺跡は、堀・柵列・建物の基壇・礎石などが確認され、17世紀後半～18世紀の陶磁器が出土している。『新編武蔵野風土記稿』の鴻巣宿の項に「文禄二年(1593)当所に御殿を建てられし」とあり、新屋敷の小名には「古へ鴻巣御殿在りし頃、御鷹部屋ありし所」と記されていることから鷹狩りに関連した施設があったと推定されている。時期は下がるが室町時代の金銅製懸仏が出土しており注目される。

第1表 周辺の遺跡一覧

鴻巣市	1 安養寺古墳群	古(前・後)
	2 九右衛門遺跡	縄(中・後)、弥(後)、古(中)、中
	3 宮前本田遺跡	縄(中)、古(前・後)、奈、中
	4 宮前遺跡	旧、縄(後)、奈、平
	5 登戸新田北遺跡	縄(前・中)、中
	6 登戸新田遺跡	弥(後)
	7 城山遺跡	旧、縄(早・前・中・後)
	8 伝源経基館跡	平
	9 大淵原遺跡	縄(中)、古(前)
	10 馬室小校庭内遺跡	縄(早・中)、古(前・後)、中
	11 権現遺跡	縄(早・後)
	12 赤台遺跡	旧、縄(早・中)、古(前～後)、奈、平、中

鴻巣市	13 馬室埴輪窯跡群	古(後)
	14 下間遺跡	縄(中・後)、古(前)
	15 新屋敷遺跡	旧、古(後)、近
	16 生出塚遺跡	旧、古(中・後)、近
	17 宮地三丁目遺跡	平、近
	18 中三谷遺跡	旧、縄(後)、古(前～後)、奈、平
	A 糺田古墳群	古(中・後)
B 糠田古墳群	古(中)	
C 馬室古墳群	古(前・後)	

旧=旧石器時代 縄=縄文時代 弥=弥生時代
 古=古墳時代 奈=奈良時代 平=平安時代
 中=中世 近=近世 (草)=草創期 (早)=早期
 (前)=前期 (中)=中期 (後)=後期 (晩)=晩期

Ⅲ 遺跡の概要

安養寺古墳群は、鴻巣市安養寺に所在し、JR高崎線鴻巣駅の北方約2kmに位置する。発掘調査は、主要地方道鴻巣羽生線のバイパス工事で歩道整備に伴うもので、平成19年1月28日から4月30日まで3ヶ月実施された。

遺跡は大宮台地が北西方向に半島状に突き出した東側にあり、大宮台地東側を元荒川が南流し、その東に加須低地が広がる。元荒川左岸の安養寺から北西方向に延びる台地上と元荒川左岸の自然堤防上に立地し、南北約600m、東西約200mと広範囲に古墳が分布している。

北側の台地上には愛宕神社古墳・安養寺南古墳があり、自然堤防上には古墳群の南端に位置する八幡神社古墳がある。

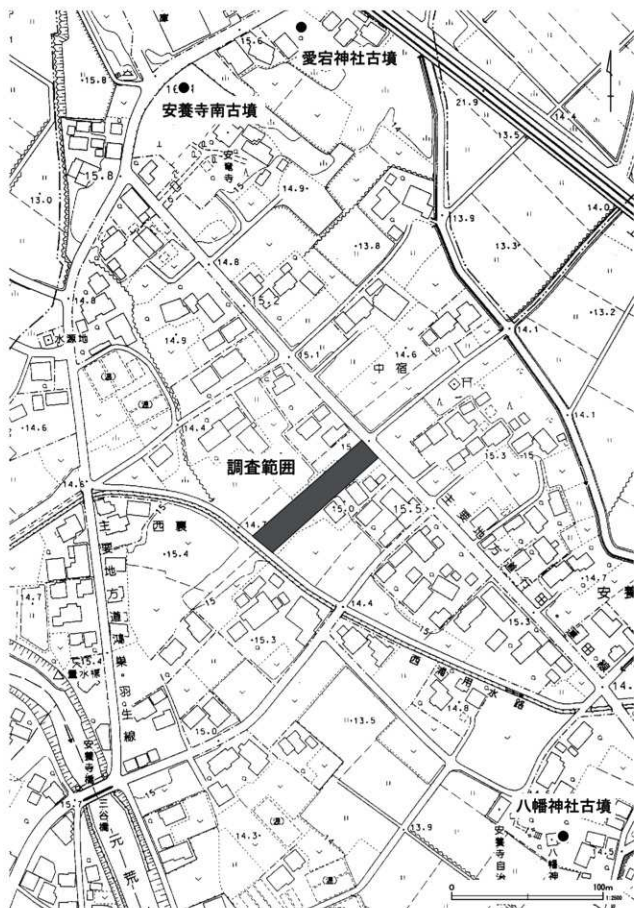
愛宕神社古墳は、北西に延びる台地の南端に立地している。円墳であったと推定され、円頭埴輪片が採取されている。安養寺南古墳は、北東約60mには愛宕神社古墳があり、台地南端に位置している。円墳と推定されるが、前方後円墳の可能性もあり、円頭埴輪片と形象埴輪片が採取されている。八幡山古墳神社古墳は、元荒川自然堤防上に立地し、円墳と推定される。円筒埴輪と形象埴輪が採取されている。3基の古墳の中では八幡神社古墳が一番古い様相がみられる。また、八幡神社古墳には直接伴うものではないが、隣接地からは鶏形埴輪が発見されている。

今回の調査区はこれらの古墳のほぼ中間にあたり、北東から南西に延びる幅12～15m、延長約90mの範囲で、面積は1,603㎡、標高は約15mを測り、調査区南西部が概ね高く、北東部が低く最高位との比高差は0.5mを測る。

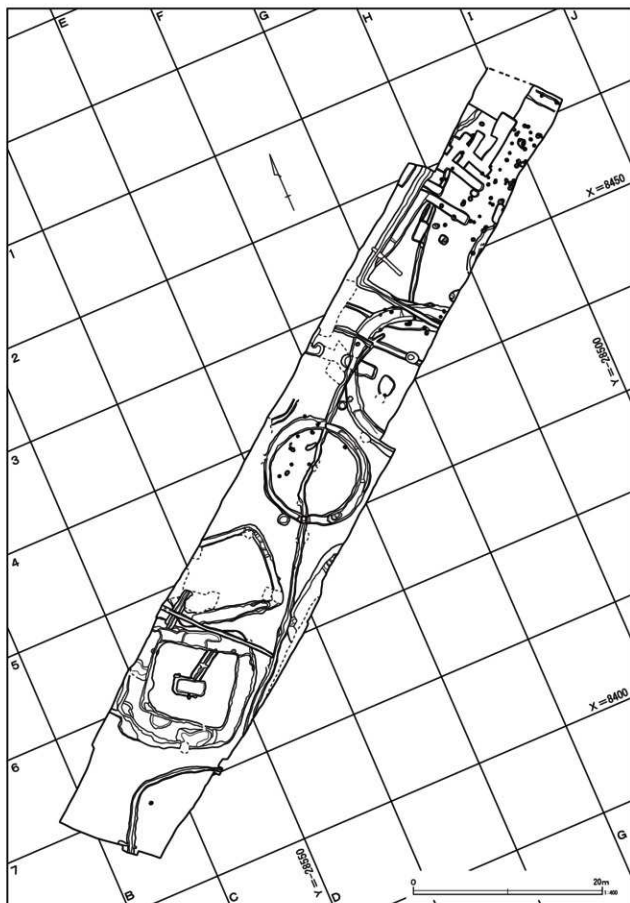
検出された遺構は、方形周溝墓3基・円形周溝墓2基のほか溝跡19条・井戸跡3基・土壌15基・ピット86基である。

方形周溝墓と円形周溝墓はいずれも重複せず、方形周溝墓は調査区の南西部にまとまり、方形周溝墓の北東部に円形周溝墓があり、明らかに存在を認識して築造されたものと考えられる。古地も方形周溝墓は調査区内で最も高い平坦な場所であり、円形周溝墓は緩やかではあるが傾斜地の低い方につくられている。方形周溝墓は周溝から土器が検出されているが、円形周溝墓の2基からは土器は検出されていない。

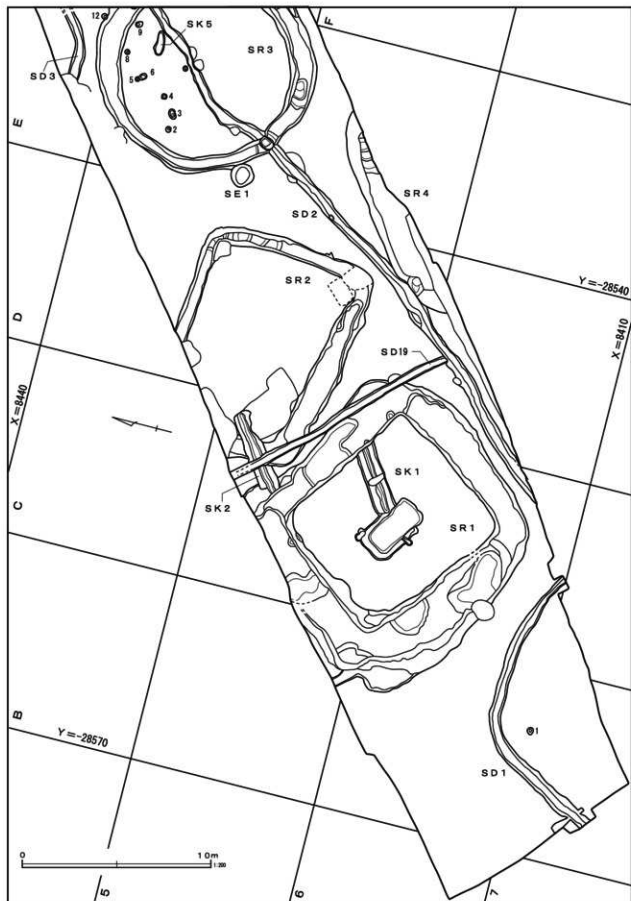
方形周溝墓は3基とも軸方位は異なっており、第1号方形周溝墓は13m前後のもので最も大きくほぼ方形で、唯一主体部が検出された周溝墓である。主体部は方台部中央に主軸方向は北西から南東方向に長方形の墓壇を掘りくぼめた掘形である。棺床面は2.5m×0.65mの長方形の範囲が墓壇上面で確認でき、鉄製短剣・ガラス小玉2点が棺床面から出土した。土器は周溝から大型壺・中型壺が周溝の各コーナーから出土しその他に、底部穿孔の壺などが出土している。第2号方形周溝墓は第1号方形周溝墓の北東に隣接し、9m×12mの長方形で周溝から壺が出土している。第4号方形周溝墓は一辺12m以上で周溝から壺が出土している。第3号円形周溝墓は、周溝外径11m、第5号円形周溝墓は周溝外径17mで北東方向に隣接している。第5号円形周溝墓より北東側では周溝墓は検出されず、土壌・溝跡のみである。井戸跡・土壌・溝跡は、方形周溝墓より後世のもので、出土遺物も中近世の陶磁器類で他に埴輪も混入している。L字状の第4号溝跡は中・近世の区画溝跡とみられる。



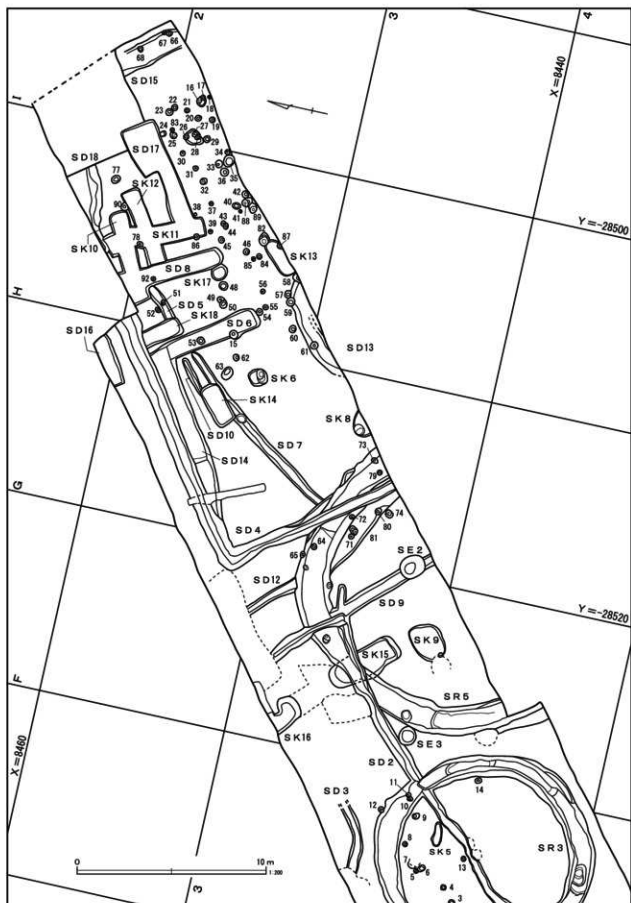
第3図 遺跡周辺の地形



第4図 調査区全体図(1)



第5图 調査区南西側全体图(2)



第6图 調査区北東側全体图(3)

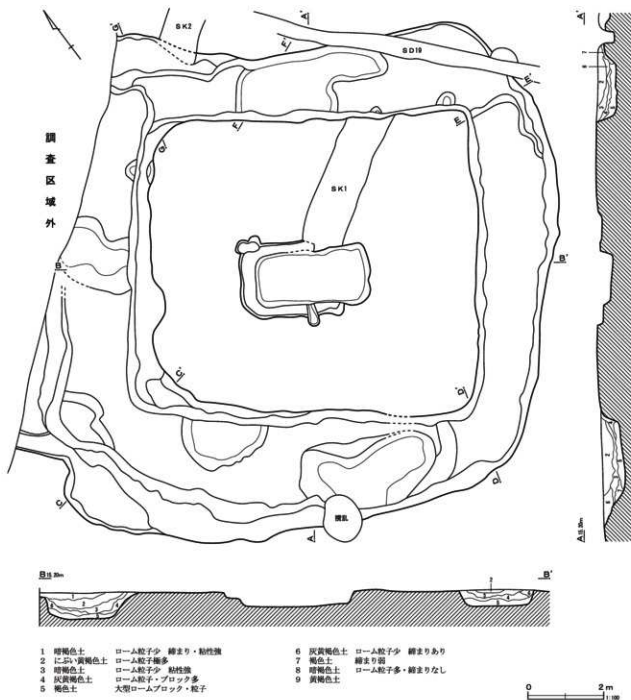
IV 遺構と遺物

1. 周溝墓

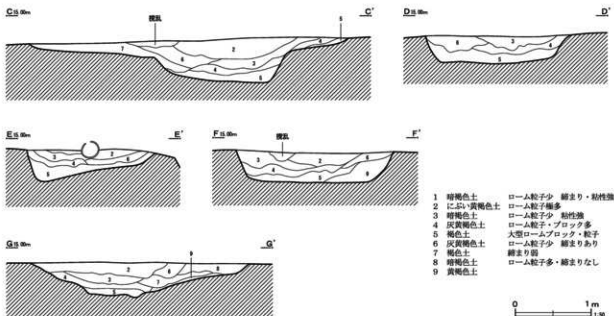
第1号方形周溝墓 (第7～14図)

B・C・D-5・6グリッドに位置する。周溝の外周北西辺および北コーナー部が調査区域外に

延びている。第1・2号土壌、第19号溝跡と重複し、全てに切られている。第1号土壌は、北東溝北コーナー寄りの上部と方台部主体部の北東辺の



第7図 第1号方形周溝墓(1)



第8図 第1号方形周溝墓(2)

一部を壊している。第2号土壌は、北西溝の北コーナー寄りの溝上部を壊している。第19号溝跡は、東コーナー周溝部を周溝溝底より深く掘り込んで壊している。

全体の平面形はやや歪んだ隅丸方形で、規模は主軸13.0m、短軸12.5mを測る。主軸方位は、N -35° -Wを指す。

方台部は方形で、各辺は直線的である。規模は主軸8.5m、短軸7.6mを測る。方台部の南西辺の西コーナー寄りには、テラス状の浅い掘り込みとなっている。

周溝は全周し、南西溝が広い。最大幅3.6m、最小幅1.35mである。概ね断面形は逆台形で、方台部側は角度があり、外周は緩やかである。北西溝と南西溝が0.5mと深く、北東溝が0.3mと浅い。

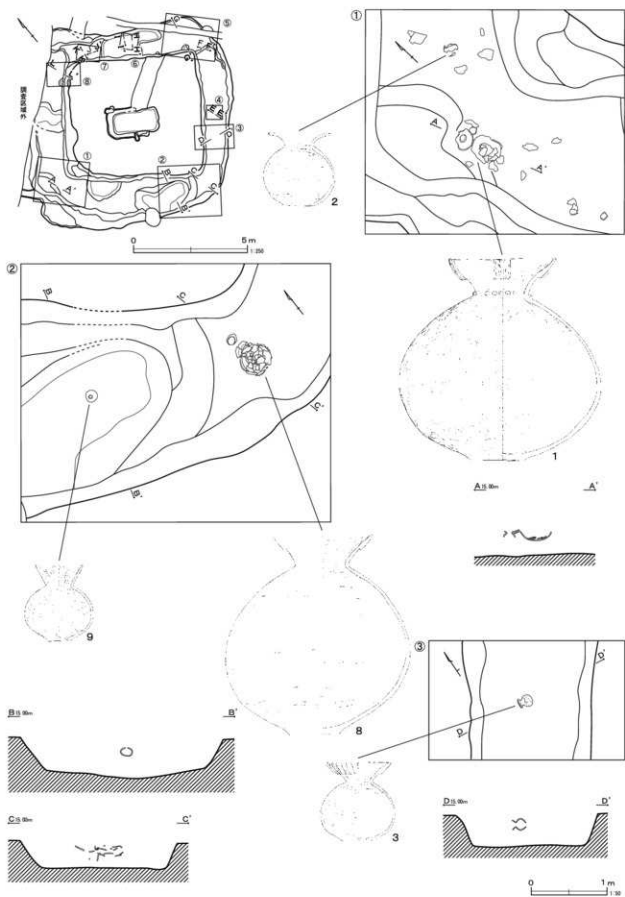
北西溝は北コーナーが調査区域外であり長さ12m程、幅は2.7m、深さ0.5mで底面は中央部が0.1mほど深くなっているが、他はほぼ平坦である。

北東溝は北コーナーが調査区域外となっており長さ10mが確認でき、幅1.35～2.40m、深さ0.3～0.4mで底面はほぼ平坦であるが、中央部が3～4cmほど低くなっている。

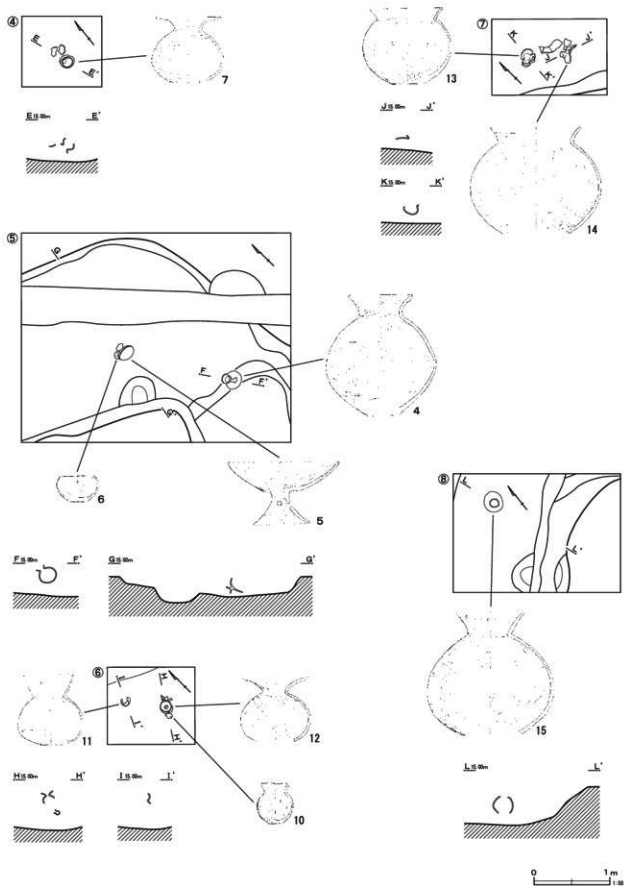
南東溝は長さ123m、幅1.5～2.15m、深さ0.3～0.4mで、底面は東コーナーが高く5～10cmの段差があり、溝中央付近まで平坦であるが、溝中央から南コーナーに向かって傾斜し10cmほど低くなる。

南西溝は長さ120m、幅2.1～3.6mで南コーナーに向かって広がっており、深さ0.5mで、溝底面は南コーナー寄りから傾斜し中央部からはほぼ平坦で、西コーナー寄りの方台部側が僅かに窪んでいる。

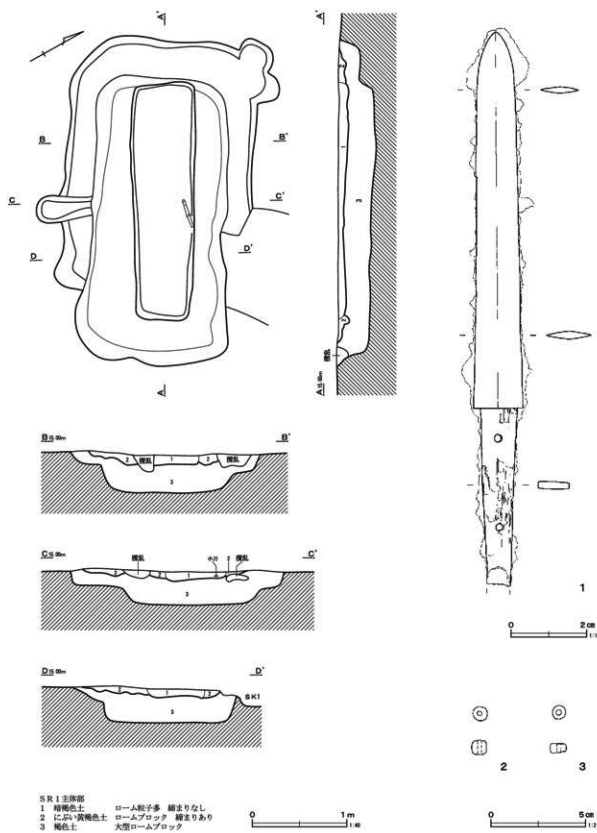
出土遺物は、土師器壺・甕・高環、ミニチュア壺・鉢、鉄製品である。壺は大型が2点、中型が2点、小型が6点である。大型壺は、西コーナー(1)と南コーナー(2)に1点ずつ、中型壺は東コーナー(6)と北コーナー(7)に1点ずつ出土している。北コーナー出土の中型壺は北コーナーから若干南西側へずれている。遺物は北西溝には少なく、北東溝に多い。西コーナーの大型壺(1)は完形で、覆土中位から北側に倒れ潰れた状態で出土した。壺(2)は、大型壺の(1)の北1.4mほどにあり、西側に倒れた状態で周溝覆土中位から出土した。南コーナーの大型壺(8)は完形で、方台部方向の北側に倒れ潰れた状態で、周溝覆土中位か



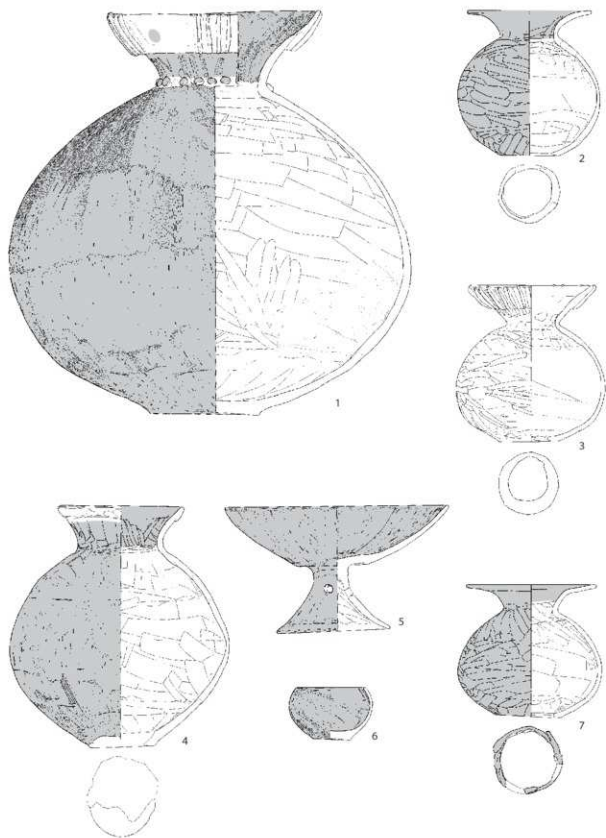
第9图 第1号方形周满墓遺物出土狀況(1)



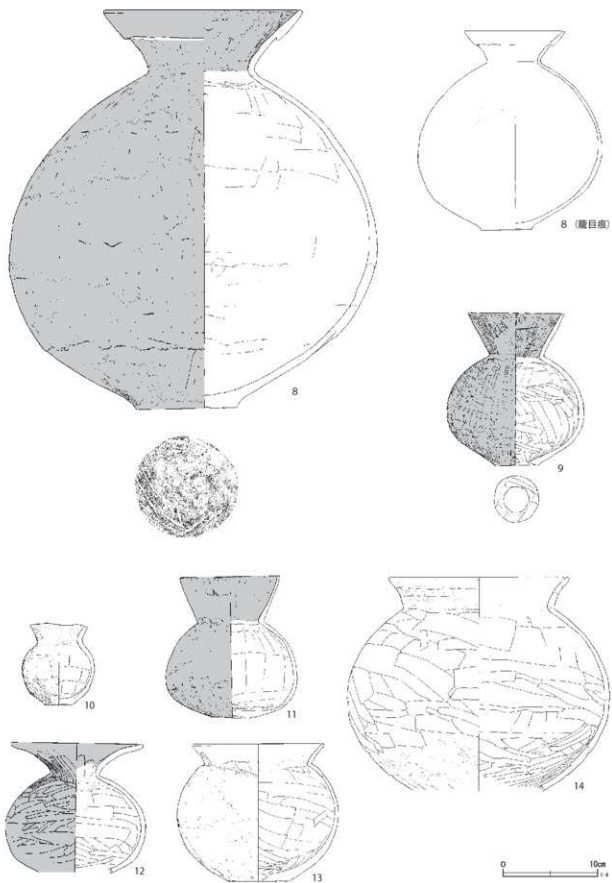
第10图 第1号方形周溝墓遺物出土狀況(2)



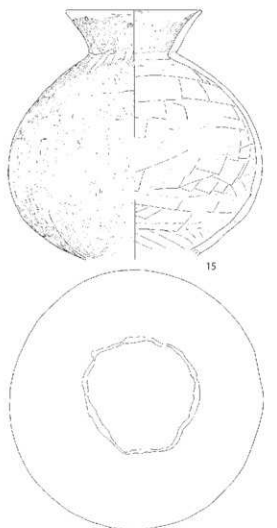
第11図 第1号方形周溝墓主体部・出土遺物



第12图 第1号方形周满墓出土遗物(1)



第13图 第1号方形周清墓出土遗物(2)



ら出土した。壺(9)は、大型壺(8)の西側2mほどの南西溝に位置し、穿孔された底部を上に向けた倒立した状態で、周溝覆土中位から出土した。

南東溝には壺2点が出土し、壺(3)は、方台部方向の西側に倒れ、完形の状態でも周溝覆土中位から出土した。壺(7)は、方台部方向の北側に倒れ、倒立気味に周溝覆土中位から出土した。

東コーナーの中型壺(4)は、北西方向に傾き斜めになり、ほぼ完形で周溝覆土中位から出土した。

高環(5)は、北東溝の中型壺(4)の北1.5mにあり、方台部の東コーナー側へ斜めに傾き、坏部に下にミニチュア鉢(6)があり、ともに溝底面近くから出土した。北東溝の中央部には、壺2点ミニチュア壺1点ある。壺(12)は正位で検出され、隣りに完形のミニチュア壺(10)が確認され、それらの南東0.5mに壺(11)を検出し、いずれも周溝確認面でも出土した。北東溝の北コーナー寄りでは壺(13・14)が検出され、周溝覆土中位から出土した。

北西溝の北コーナー寄りに、底部が打ち欠かれた中型壺(15)が正位で検出され、覆土中位から出土した。

主体部 (第11図)

主体部は方台部ほぼ中央に検出され、東部が第1号土壌と重複し、一部壊されている。棺床面は長さ2.50m、幅0.65mの隅丸長方形で、深さ5~8cmである。主軸方位はN-60°-Wを指す。

棺床面の下の方墳の掘形は二段の掘り込みがあり、隅丸長方形で長さ3.5m、幅2.0m、深さ0.2mの墓壇と、更に一段目の墓壇の底面を長さ3.0m、幅1.45m、深さ0.2mの墓壇が設けられている。

副葬品は、鉄剣は切先を西に向けて、棺床面北東辺のほぼ中央部から、ガラス小玉2点は棺床面北西端の北隅から出土している。鉄剣(1)は短剣で、茎尻を欠損し現存長29.4cm、刀身長19.9cm、茎現存長9.5cm、刀身最大幅2.6cm、厚さ0.4cm、重さ94.5gである。ガラス小玉は色調がコバルトブ

第14図 第1号方形周溝墓出土遺物(3)

第2表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表(第12～14図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	壺	22.2	42.9	11.5	95	赤白	普通	にぶい橙	赤彩 口縁部棒状浮文4本単位5個所 単位間に朱文 頸部円形浮文
2	土師器	壺	12.9	15.4	6.3	60	石赤白	良好	にぶい橙	赤彩 底部焼成前穿孔
3	土師器	壺	12.9	16.6	6.4	100	角赤白	良好	にぶい橙	口縁部棒状浮文 底部焼成前穿孔
4	土師器	壺	(13.0)	25.6	6.8	95	赤白	良好	橙	赤彩 底部焼成後穿孔
5	土師器	高坏	23.5	13.5	11.9	100	雲白	良好	橙	内外面赤彩 脚部円孔3
6	ミニチュア	鉢	7.3	5.5	(4.0)	95	石赤白	良好	にぶい橙	内外面赤彩
7	土師器	壺	13.4	14.0	7.0	95	角石赤白	良好	橙	赤彩 底部焼成前穿孔
8	土師器	壺	20.6	42.4	10.6	95	石赤白	良好	にぶい橙	内外面赤彩 胴部外面亀目・黒斑
9	土師器	壺	(10.0)	16.2	4.7	90	角赤白	良好	にぶい橙	赤彩 底部焼成後穿孔
10	ミニチュア	壺	6.0	8.6	2.8	100	石砂白	普通	にぶい黄橙	
11	土師器	壺	(10.3)	15.0	3.9	60	角白	良好	にぶい黄橙	赤彩
12	土師器	壺	13.7	13.8	—	80	砂赤白	良好	にぶい赤濁	赤彩
13	土師器	甕	(13.6)	14.6	6.5	75	赤白	良好	にぶい橙	
14	土師器	甕	(19.0)	(22.7)	—	40	角赤白	良好	にぶい橙	外面煤付着
15	土師器	壺	14.2	(26.6)	—	95	角石赤白	良好	橙	底部焼成後穿孔 胎土に土器片含む 外面黒斑
16	鉄製品	不明	現存長3.2	幅0.7	厚さ0.6	重さ(5.6)g				
17	鉄製品	不明	現存長3.3	幅0.8	厚さ0.2	重さ(2.5)g				

ルーである。(2)は、径4mm、高さ4mm、孔径1mm、(3)は径4mm、高さ2～3mm、孔径1.5mmである。

第2号方形周溝墓(第15・16図)

C・D-4・5グリッドに位置する。北西部が調査区域外へ延びているため、北西コーナーから北溝と西溝の一部は確認できない。南西コーナー付近が第2号土壌と第19号溝跡に壊されていた。

全体の平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は主軸120m、短軸9.15mを測る。主軸方位はN-8°Eを指す。方台部やや歪んだ隅丸長方形で、各辺は直線的である。規模は主軸9.8m、短軸6.9mである。

周溝は全周し、南溝が広く、北溝・東溝が細い。最大幅1.60m、最小幅0.57mである。概ね断面形は逆台形で、方台部側・外周ともに角度があるが、外周は方台部側に比べ僅かに緩やかである。南溝が0.58mと深く、西溝が0.27mと浅い。北溝は西側が調査区域外に延びており、長さ6.2mを確認

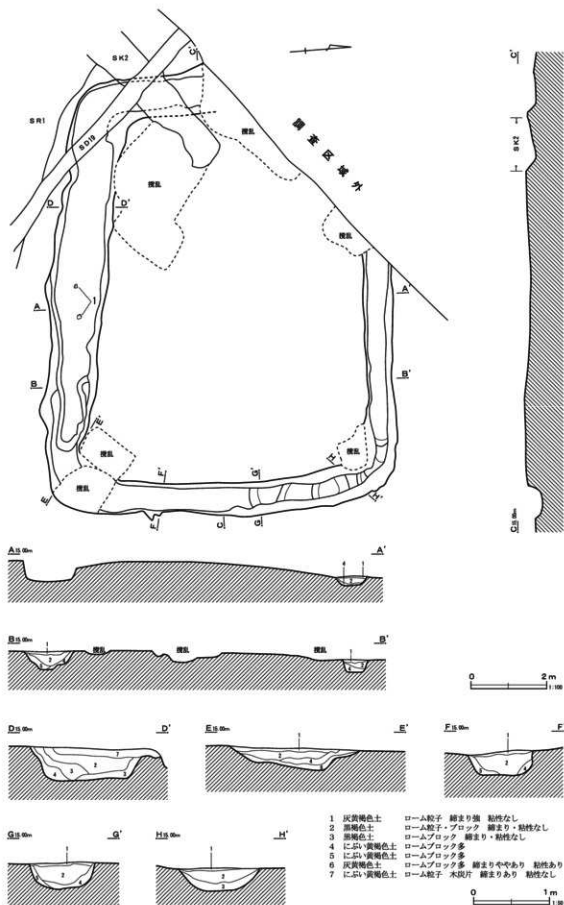
でき、幅0.64～0.80m、深さ0.33～0.53mで、底面は西から北東コーナーに向かって傾斜して低くなる。

東溝は南東コーナーが攪乱されているが、長さ9.1m、幅0.70～0.98m、深さ0.40mで、底面は南から北東コーナーへ向かって傾斜し、階段状に段差を有して低くなる。

南溝は南東コーナーが攪乱されているが、長さ11.2m、幅0.95～1.60m、深さ0.2～0.5mで、底面はほぼ平坦であるが南西コーナーより浅い。

西溝は大部分が調査区域外で一部攪乱され、長さ3.35mを確認でき、幅1.10m、深さ0.27～0.37mで、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は、土師器壺、形象埴輪・円筒埴輪である。土師器壺は、底部付近の破片が南溝中央部の覆土中位より出土した。形象埴輪は北東コーナーの周溝から出土し、形象埴輪の一部が剥離したものとみられる。円筒埴輪は透孔の一部が確認されており、東溝南部から出土した。



第15図 第2号方形周溝墓



第16図 第2号方形周溝墓出土遺物

第3表 第2号方形周溝墓出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	壺	—	(5.8)	(8.3)	40	赤白黒	普通	にぶい橙	

第4表 第2号方形周溝墓出土埴輪観察表(第16図)

番号	種別	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	出土位置	備考
2	形象	赤白黒	普通	橙	ハケメ・ナデ 8本/1.3cm	ハケメ 10本/1.5cm	周溝北東 コーナー	剥離したもの
3	円筒	石黒白	普通	橙	タテハケ 7本/2.0cm	ココナデ	東溝南東部	透かし孔あり

第4号方形周溝墓(第17～19図)

D・E-5、D-6グリッドに位置する。北西溝の外周部だけで、ほとんどが調査区域外である。第2号溝跡と重複し、西コーナー外周の一部が壊されている。

全体の平面形は隅丸方形と推定され、確認できた北西溝の規模は長さ11.7mを測る。確認できる北西溝を基準とすると、主軸方位はN-52°-Eを指す。

周溝は最大幅2mが確認でき、深さ0.65mで、底面はほぼ平坦であるが、北コーナー部に階段状の段差があり深くなっており、最も深いところで1.1mを測る。

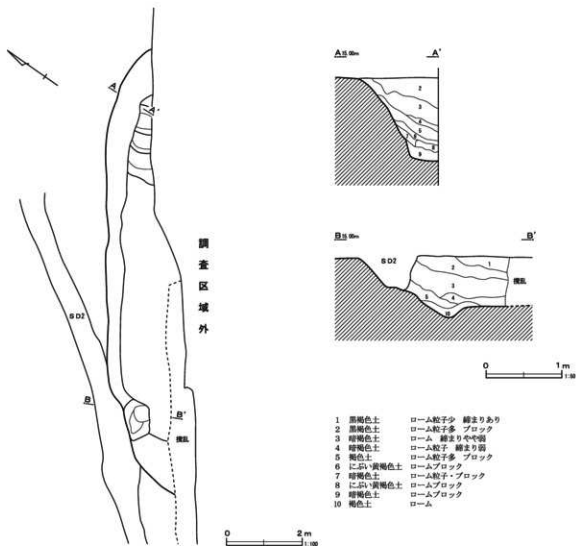
出土遺物は土師器壺、円筒埴輪片、砥石である。土師器壺は、確認できた北西溝の中央部で検出された。土師器壺(1)は、ほぼ完形で底部が打ち欠かれており、周溝外側の北方向へ倒れており、周溝覆土中位から出土した。壺(2)は複合口縁の壺であるが、複合部が剥離した壺口縁部で、周溝覆土低位から出土した。壺の複合口縁が剥離した(3)・(4)、円筒埴輪(5)、砥石(6)・(7)は周溝の東部から出土した。

第3号円形周溝墓(第20図)

E-3・4・5、F-4グリッドに位置する。中央部を第2号溝が縦断し、第1号井戸跡、第5号土壇やピットと重複し、すべてに切られている。第2号溝跡は周溝と重複しているが、周溝溝底より浅いため、周溝の上部を壊しているが周溝溝底と壁の立ち上がりの一部が遺存している。

全体の平面形は円形で、規模は周溝外径10.9～11.3m、周溝内径8.9～9.1mを測る。周溝は西側のみが細く0.7m、他は1.5mである。概ね断面形は逆台形で、深さは溝以東の東側が深く0.55～0.60m、他は0.3mほどである。底面は第2号溝以西はほぼ平坦であるが、第2号溝以東は僅かに掘り窪められた所があり平坦ではない。

出土遺物は、検出されなかった。



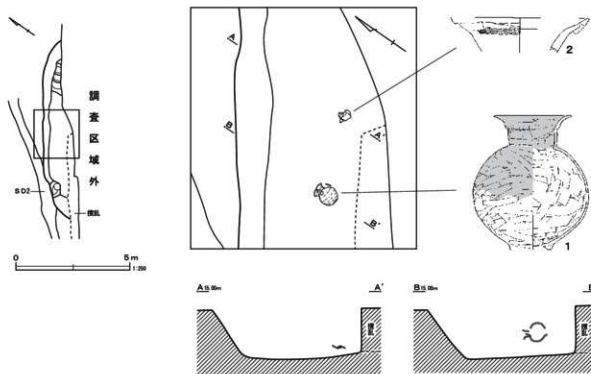
第17図 第4号方形周溝墓

第5表 第4号方形周溝墓出土遺物観察表 (第19図)

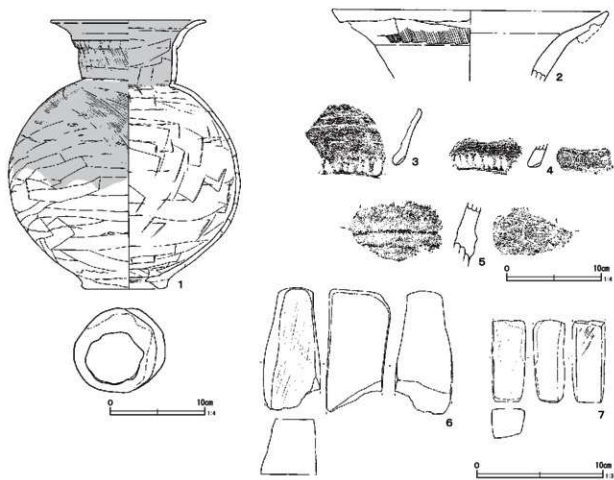
番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器	壺	16.3	28.6	(9.0)	100	雲角砂白	良好	にぶい橙	赤彩 底部焼成後穿孔 黒斑
2	土師器	壺	(29.3)	(7.5)	—	20	角白礫	普通	にぶい橙	複合口縁部剥離
3	土師器	壺	—	—	—	—	赤白礫	普通	にぶい橙	複合口縁部剥離破片
4	土師器	壺	—	—	—	—	赤白礫	普通	にぶい橙	複合口縁部剥離破片
6	石製品	砥石	長さ(9.8)	幅4.5	厚さ4.2	重さ(286.0)g	凝灰岩製			
7	石製品	砥石	長さ(6.5)	幅2.6	厚さ2.4	重さ(60.7)g	凝灰岩製			

第6表 第4号方形周溝墓出土埴輪観察表 (第19図)

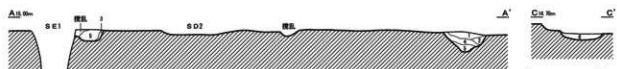
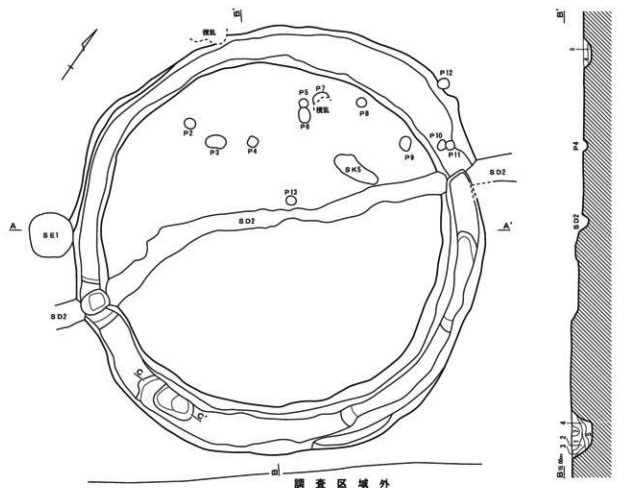
番号	種別	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	出土位置	備考
5	円筒	赤白礫	普通	にぶい黄橙	突帯ナデ	ヨコハケ 15本/25cm	周溝東部	突帯低いM字 幅3.0cm



第18圖 第4号方形周溝墓遺物出土狀況



第19圖 第4号方形周溝墓出土遺物



- | | | | | | | | |
|-----------|---------|-------|----------|-----------|---------|----------|--------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック | 赤褐色粗砂 | 締まり・粘性なし | 5 にぶい黄褐色土 | ローム粒子 | 締まりなし | 粘性ややあり |
| 2 灰黄褐色土 | | | 締まり・粘性なし | 6 褐色土 | ロームブロック | 締まりやや強 | 粘性あり |
| 3 にぶい黄褐色土 | ローム土 | 締まりなし | 粘性あり | 7 黒褐色土 | 赤褐色粗砂 | 締まり・粘性なし | |
| 4 灰黄褐色土 | ローム粒子 | 赤褐色粗砂 | 締まり・粘性なし | | | | |

第20図 第3号円形周溝墓

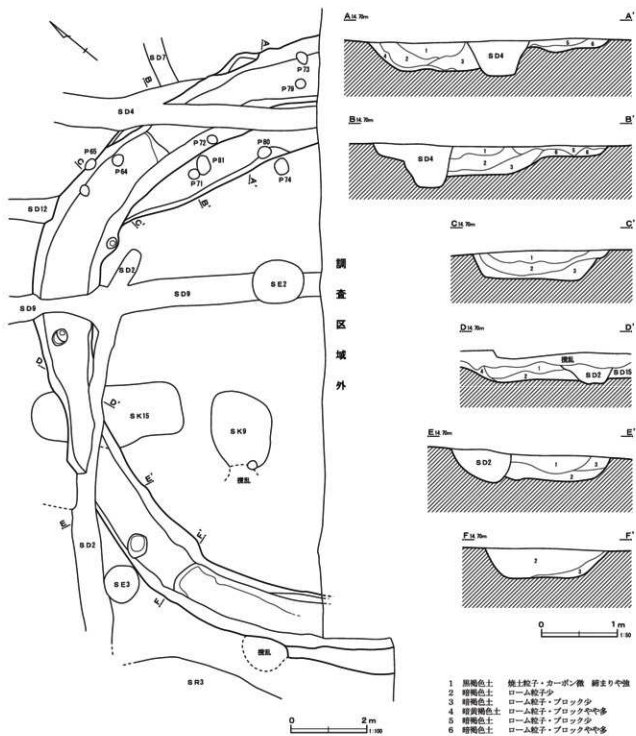
第5号円形周溝墓 (第21図)

F-3・4、G-3グリッドに位置する。およそ全体の1/2ほどが南東側の調査区域外である。第2号井戸跡、第9号土壌、第2・4・9・11・12号溝跡やピットと重複して、全てに切られている。

全体の平面形は円形と推定され、規模は周溝外径17.0m、周溝内径14.0mを測る。周溝は北西側

が細く1.15m、北東側が広く2.75mである。概ね断面形は逆台形で、台部側に角度がある。深さは北東部周溝が深く0.8m、西部の周溝は浅く0.2～0.3m、他は0.5m程である。底面はほぼ平坦であるが、西部の周溝は第9号溝跡以南は次第に高くなり、第3号井戸跡以南は平坦になり、0.2m程北の周溝より高くなる。

出土遺物は検出されなかった。



第21図 第5号円形周溝墓

- 1 黒褐色土 粘土粒子・カーボン微 餅まりや強
- 2 暗褐色土 ローム粒子少
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子・ブロックやや多
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ブロックやや多

2. 井戸跡

調査時に土壌の番号が付されていたが井戸跡であることが判明したため、第4号土壌を第1号井戸跡、第7号土壌を第2号井戸跡に変更し、番号が付与されていなかったF-3グリッド内の井戸跡を第3号井戸跡とした。

第1号井戸跡 (第22図)

調査時は第4号土壌としていたが、井戸跡である。E-4グリッドに位置する。第3号方形周溝墓と重複し、第3号円形周溝墓の南西側周溝外周を掘り込んでいる。

平面形はほぼ円形で、規模は径1.25m、深さ1.8m以上を測る。

第2号井戸跡 (第22・23図)

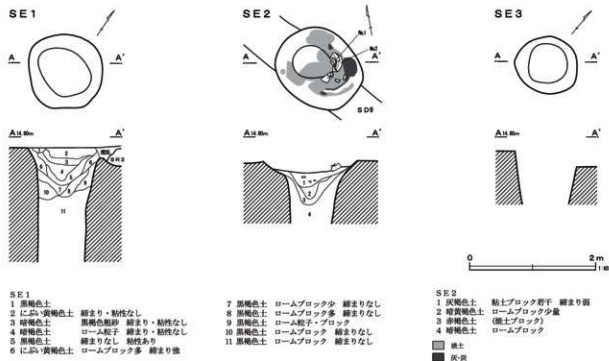
調査時は第7号土壌としていたが、井戸跡である。F・G-3グリッドに位置する。第9号溝跡と重複し切っている。平面形は楕円形で、主軸方

位は、N-40°-Wを指す。規模は主軸1.35m、短軸1.17m、深さ1m以上を測る。焼土か壁面及び覆土の一部を覆っていた。

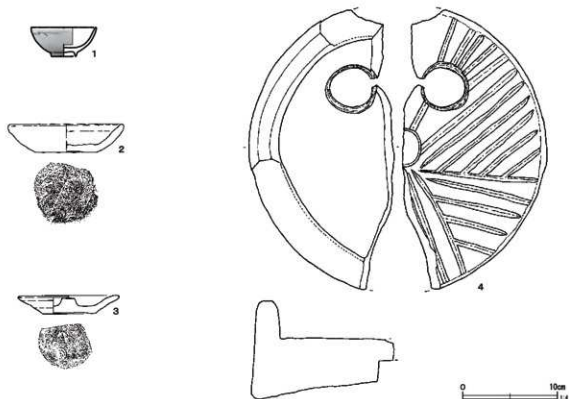
出土遺物は、石臼・磁器小坏・陶器蓋・かわらけがあり、覆土上面から出土し、かわらけ(2)は石臼の上に乗っていた。石臼は上白で径31.2cm、厚さは中央で4.5cm、縁の部分で10.3cm、縁の高さ4.0cmを測る。軸穴の径4.2cm、注入口の径5.0cmを測る。下白と接する下面の目立ては、6分割の目立てである。安山岩製である。

第3号井戸跡 (第22図)

F-3グリッドに位置する。第2号溝跡と重複しているが、先後関係は不明である。平面形は円形で、規模は径0.92m×0.98m、深さ0.8m以上を測る。



第22図 第1～3号井戸跡



第23図 第2号井戸跡出土遺物

第7表 第2号井戸跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	遺構	種別	器種	産地	残存 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	軸葉装飾	整形技法	器種・器形の特徴	文様	備考
1	S E 2	磁器	小坏	肥前	95	6.9	3.1	2.7	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	笹文	18C中～後葉
2	S E 2	土器	かわらけ		55	(11.4)	2.7	6.2	浅黄		轆轤	底部・軸・糸切り		
3	S E 2	陶器	蓋	瀬戸・美濃	50	(10.0)	1.8	(5.2)	淡黄	鉄軸	轆轤			17C後～18C初
4	S E 2	石製	石臼									石臼の上部		安山岩製

3. 土壌

H-2グリッド内の番号が付されていない土壌を第17号土壌とし、第16号土壌が2基確認されたため、G・H-2グリッド内の第16号土壌を第18号土壌に変更した。

第1号土壌 (第24図)

C-5・6グリッドに位置する。第1号方形周溝墓・第19号溝跡と重複し、第1号方形周溝墓の主体部と北東周溝上部を切り、第19号溝跡に切られている。

平面形は長方形で、主軸方位は、N-55°-Eを指す。規模は長さ566cm確認でき、幅155cm、

深さ21cmを測る。

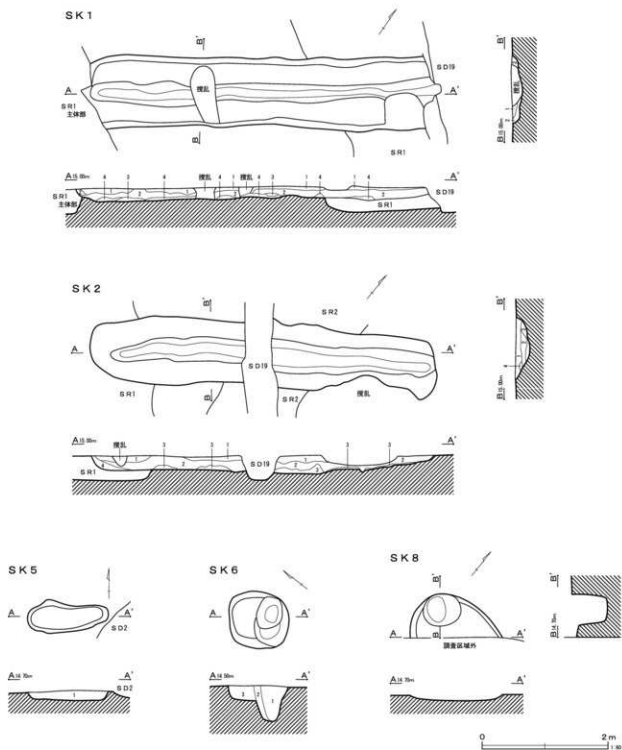
遺物は、図示できないが須恵器片、土師器片、陶磁器片が出土した。

第2号土壌 (第24図)

C-5グリッドに位置する。第1・2号方形周溝墓、第19号溝跡と重複し、第1・2号方形周溝墓の周溝上部を切り、第19号溝跡に切られている。

平面形は長楕円形で、主軸方位は、N-50°-Eを指す。規模は長さ545cm、幅108cm、深さ28cmを測る。

遺物は、図示できないが土師器片・陶器片が出



- SK 1
 1 褐灰色土 炭化木片 締まり・粘性強
 2 黒色土 ローム粒子・焼土粒子 炭化物多 白色細砂 締まり・粘性なし
 3 黒色土 ローム粒子・焼土粒子 締まり・粘性なし
 4 黄褐色土 ローム土 焼土粒子・炭化木片多 締まりなし

- SK 2
 1 褐灰色土 締まり・粘性強
 2 灰黄褐色土 炭化物多
 3 黄褐色土 ローム土 炭化物多 締まりなし
 4 黄褐色土 ローム土 締まりなし

- SK 5
 1 に近い黄褐色土 ロームブロック少 締まり・粘性なし

- SK 6
 1 黄褐色土 ローム粒子少
 2 暗黄褐色土 ロームブロック少
 3 灰黄褐色土 ローム粒子強

第24図 土壌 (1)

土した。

第3号土壌 (欠番)

第4号土壌 (SE1に変更)

第5号土壌 (第24図)

E-4グリッドに位置する。第3号円形周溝内にある。

平面形は不整楕円形で、主軸方位は、N-90°-Eを指す。規模は主軸128cm、短軸55cm、深さ16cmを測る。

第6号土壌 (第24図)

G-2グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、南壁際にピットがある。主軸方位は、N-8°-Eを指す。規模は105cm×95cm、深さ22cmを測る。ピットは楕円形で、長軸70cm、短軸53cmで、南西側がテラス状をし、テラス部分が深さ35cm、北東側は深さ55cmを測る。

第7号土壌 (SE2に変更)

第8号土壌 (第24図)

G-3グリッドに位置する。南東側が調査区域外となっている。

平面形は円形と推定され、西壁際にピットがある。径103cmが確認でき深さ9cmを測る。ピットは円形で規模は径50cm×60cm、深さ57cmを測る。

遺物は図示できないが、陶器片が出土した。

第9号土壌 (第25図)

F-3・4グリッドに位置する。西壁際に攪乱されている。

平面形は不整楕円形で、主軸方位は、N-20°-Eを指す。規模は長軸280cm、短軸170cm、深さ24cmを測る。

第10号土壌 (第25・27図)

H-1・2グリッドに位置する。第8号溝・第11号土壌と重複する。第8号溝跡が西側にあり、第11号土壌とは直交しているが、先後関係は不明である。

平面形は隅丸長方形で、主軸方位は、N-64°-Eを指す。規模は長さ327cmが確認でき、幅104cm、

深さ32cmを測る。

遺物は、円筒埴輪片が出土した。

第11号土壌 (第25・27図)

H-1・2グリッドに位置する。第10・12号土壌、第17・18号溝跡・ピット78・86と重複する。2基の土壌とは直交し、第12号土壌の方が新しく、第18号溝に切られているが、第10号土壌・第17号溝・ピット78・86との先後関係は不明である。

平面形は長方形で、主軸方位は、N-25°-Wを指す。規模は長さ535cm、幅125cm、深さ33cmを測る。

遺物は、陶磁器・焙烙が出土した。

第12号土壌 (第25図)

H-1・2グリッドに位置する。第11号土壌・第8号溝跡・ピット90と重複している。第11号土壌を掘り込み、第8号溝・ピット90との先後関係は不明である。平面形は長方形で、主軸方位は、N-49°-Eを指す。規模は長さ421cmが確認でき、幅125cm、深さ33cmを測る。

遺物は図示できるものはなかったが、陶磁器が出土した。

第13号土壌 (第25図)

H-2グリッドに位置する。南東側が調査区域外へへがり、ピット82・87と重複している。ピットとの先後関係は不明である。

平面形は隅丸長方形で、主軸方位は、N-47°-Eを指す。規模は長さ216cm、幅は74cmが確認でき、深さ26cmを測る。

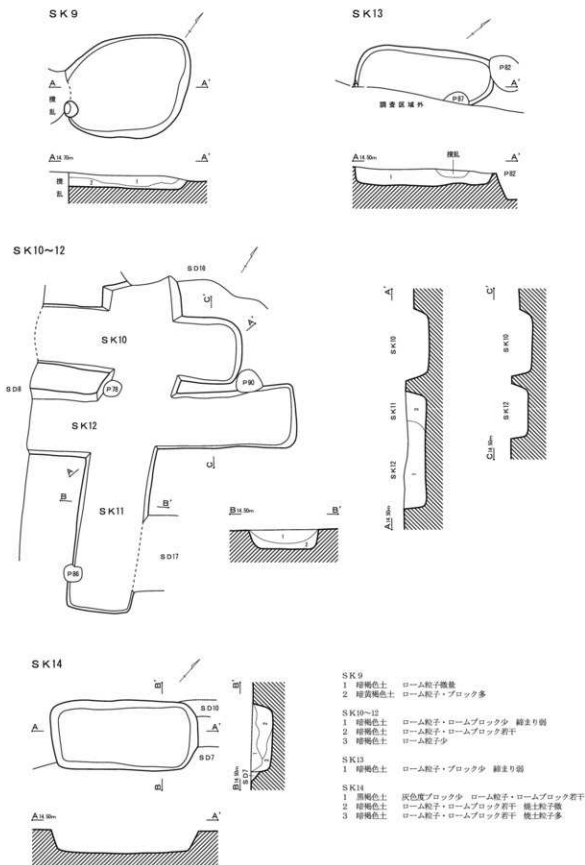
第14号土壌 (第25図)

G-2グリッドに位置する。第7・10号溝跡と重複し、両溝跡を切っている。

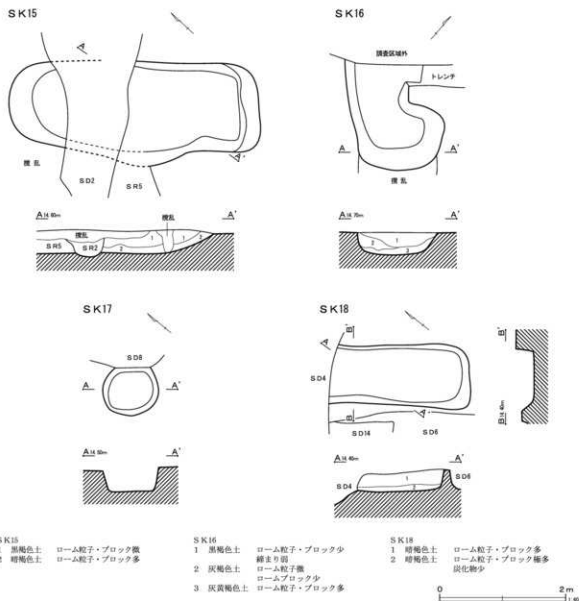
平面形は長方形で、主軸方位は、N-49°-Eを指す。規模は長さ237cm、幅110cm、深さ35cmを測る。

第15号土壌 (第26・27図)

F-3グリッドに位置する。第5号円形周溝跡・第2号溝跡と重複している。第2号溝跡に切



第25図 土壌 (2)



第26図 土壌 (3)

られ、第5円形周溝墓を掘り込んでいる。

平面形はU字状で、短辺の両側が直線的な辺と湾曲した辺になっている。主軸方位は、N-43°-Wを指す。規模は長さ393cm、163cm、深さ26cmを測る。

遺物は陶磁器、砥石、形象埴輪が出土した。埴輪は人物埴輪の腕である。

第16号土壌 (第26図)

F-3グリッドに位置する。北西側が調査区域外となっている。

平面形はL字状で、北西辺を基準とすると主軸方位は、N-50°-Eを指す。規模は長さ167cmが確認でき、幅は北西部が97cm、南東部が140cm、深さ36cmを測る。

第17号土壌 (第26図)

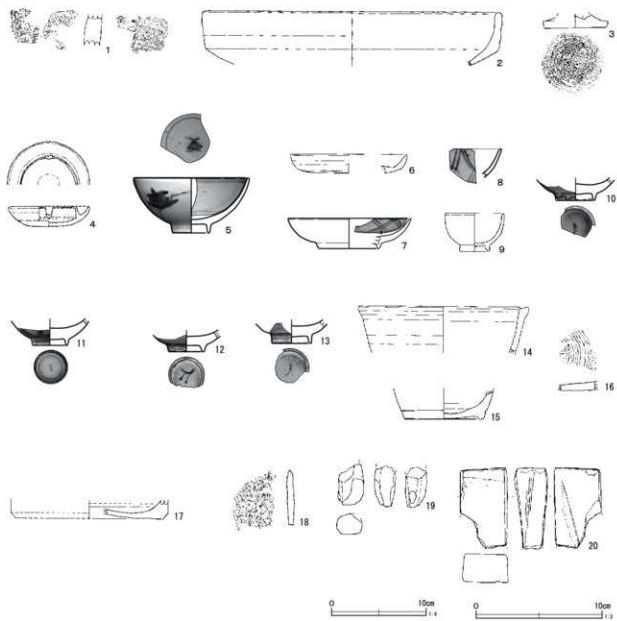
H-2グリッドに位置する。第8号溝跡と重複しているが、先後関係は不明である。

平面形は円形で、径86cm×92cm、深さ36cmを測る。

第18号土壇 (第26図)

G・H-2グリッドに位置する。第4号溝跡と重複しているが、先後関係は不明である。

平面形は長方形で、主軸方位は、N-24°-Wを指す。長さは218cmが確認でき、幅95cm、深さ30cmを測る。



第27図 土壇出土遺物

第8表 土壇出土埴輪観察表 (第27図)

番号	種別	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	出土位置	備考
1	円筒	赤白黒	普通	にぶい橙	タテハケ14本/1.3cm	ヨコハケ 15本/1.3cm	S K 15	
19	形象	白砂	普通	橙	側面に突起		S K 15	人物埴輪製

第9表 土壌出土遺物観察表(第27図)

番号	遺構	種別	器種	産地	残存 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	釉薬装 飾	整形 技法	器種・器形 の特徴	文 様	備 考
2	SK10	土器	焙烙		10	(13.2)	(5.7)			橙				外面煤付着
3	SK11	陶器	ひょう陶	瀬戸・美濃	10		(1.7)	6.7	灰白	鉄軸	轆轤	底部糸切り		18C
4	SK11	陶器	灯明皿	瀬戸・美濃	95	8.6	2.1	4.1	褐灰	鉄軸	轆轤	油溝U字形		腹:環状の重む焼痕 18C後か
5	SK11	磁器	碗	肥前	25	(15.9)	5.8	3.8	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	草花文・一重園線・二重園線	目跡見込み砂粒 費付砂粒 18C前半
6	SK15	陶器	皿	瀬戸・美濃	15	(12.2)	(2.0)		灰白	灰軸	轆轤		欄絵か	18C中～後
7	SK15	磁器	皿	肥前	15	(12.8)	3.2	(6.2)	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	格子目文 二重園線	目跡見込み砂粒 費付砂粒18C後
8	SK15	磁器	碗	肥前	5	(12.0)	(2.6)		灰白	透明軸	轆轤		格子目文	18C
9	SK15	磁器	碗	瀬戸・美濃	30	(6.1)	4.0	3.1	灰白	透明軸	轆轤			18C後
10	SK15	磁器	碗	肥前	70		(2.4)	(4.0)	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	雪輪文 高台 内路	費付砂粒 18C中～後葉 くらわんか碗
11	SK15	磁器	碗	肥前	80		(2.9)	3.4	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	雪輪文 園線 高台内路か	費付砂粒 18C中～後葉 くらわんか碗
12	SK15	磁器	碗	肥前	50		(2.3)	3.7	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	園線・二重園線	18C中～後葉 くらわんか碗
13	SK15	磁器	碗	肥前	30		(2.5)	(4.0)	灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台	園線・二重園線	目跡見込み砂粒 費付砂粒 18C中～後葉 くらわんか碗
14	SK15	陶器	鉢	瀬戸・美濃	10	(17.6)	(5.0)		灰白	透明軸	轆轤	削り出し高台		口縁トチン跡 18C後葉
15	SK15	陶器	瓶	瀬戸・美濃	25		(3.3)	(8.4)	淡黄	灰軸	轆轤			高台内目跡胎土 小粒子付着 18C後～19C前
16	SK15	陶器	摺鉢	信楽か	5		(1.0)		褐灰			卸目9本/条		18C代か
17	SK15	陶器	鉢	瀬戸・美濃か	15		(2.0)	15.5	赤褐	鉄軸	轆轤			19Cか 底面歪み
18	SK15	石器	板碑			長さ(5.8)	幅(4.7)	厚さ0.7			緑泥片岩製			線刻内容不明
20	SK15	石製	砥石			長さ(6.4)	幅3.6	厚さ2.2	重さ(81.6)g		凝灰岩製			

4. 溝跡

SDAと番号を付されていた溝跡は、第19号溝跡に変更した。

第1号溝跡(第28図)

B-6・7、C-6グリッドに位置する。南西から南東方向に湾曲し、両端とも調査区域外へ延びている。

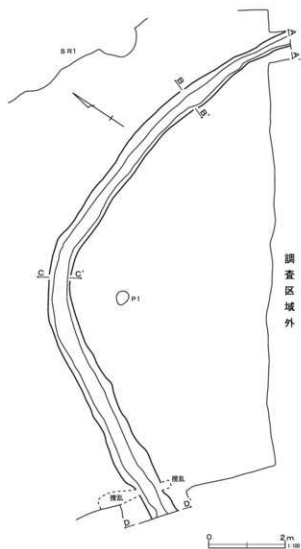
全長約16mが確認でき、幅0.3～1.45m、深さ0.03～0.34mを測る。溝底は南東側が高く南西側へ向かって低くなり、高低差は0.5mを測る。

遺物は図示できないが、須恵器片・縄文土器片が出土した。

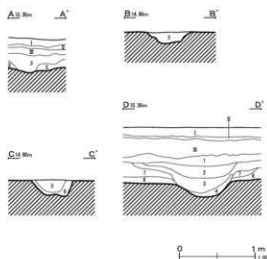
第2号溝跡(第29～33・35図)

C-6、D-5・6、E-4・5、F-3・4グリッドに位置する。調査区を縦断し、南西側が調査区域外へ延びている。第3号円形周溝墓・第4号方形周溝墓・第5号円形周溝墓、第15号土壌、第9・19号溝跡と重複する。第19号溝跡との先後関係は不明であるが、他の遺構をすべて切っている。

走行方位はほぼN-39°-Eを指し、全長約45mが確認でき、幅0.45～0.80m、深さ0.07～0.34mを測る。溝底はほぼ平坦であるが、第3号



第28図 第1号溝跡



- | | |
|-----------|-------------------|
| I 褐灰色土 | 締まりなし |
| II 灰色赤褐色土 | 洗眼Cの礫石 締まり強 粘性なし |
| III 暗褐色土 | 締まり強 粘性ややあり |
| 1 暗褐色土 | 粘土ブロック多 締まり・粘性強 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・小ブロック 締まり極強 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック多 締まりややあり |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック多 締まり強 |
| 5 灰黄褐色土 | ロームブロック多 締まりややあり |
| 6 灰黄褐色土 | 粘性極強 |
| 7 暗褐色土 | 締まり・粘性強 |
| 8 暗褐色土 | ロームブロック 褐色色ブロック |
| 9 暗褐色土 | 締まり極強 |
| 10 暗褐色土 | ローム 締まり・粘性極強 |

円形周溝墓以東のF-3グリッドでは0.3mほど低くなる。

遺物は、形象埴輪・円筒埴輪、鉄鏃と角閃石安山岩が出土した。形象埴輪は武人埴輪の腕の部分で粘土紐により籠手を表現している。円筒埴輪は突帯の部分である。鉄鏃は柳葉鏃で両丸造のもので、現存長8.0cm、現存鏃身長5.0cm、最大幅2.3cm、厚さ0.4cm、重さ30.1gである。角閃石安山岩は工具加工痕や平滑に磨られた面があり、現存する大きさは24cm×17cm、厚さ10cm～15cm、重さ3.24kgである。

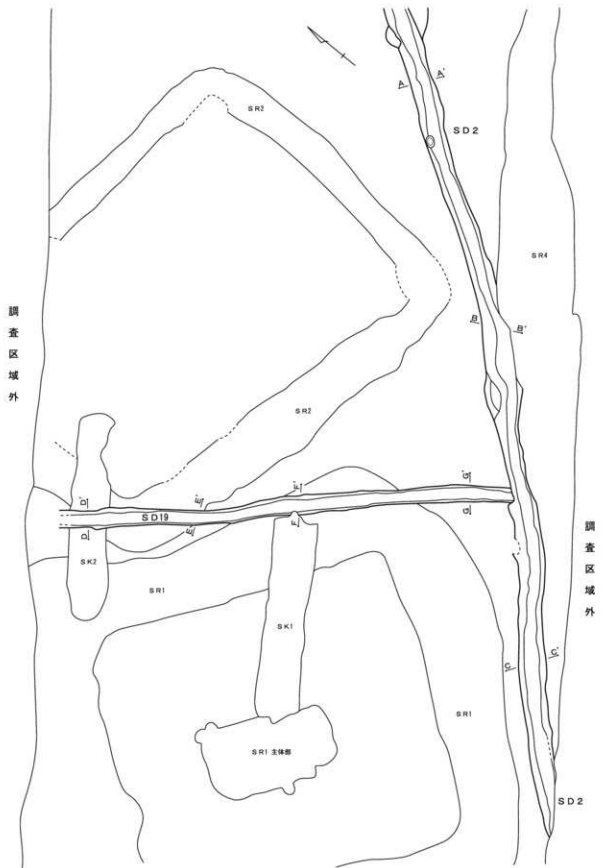
第3号溝跡 (第31図)

E-3グリッドに位置する。西から北東方向に

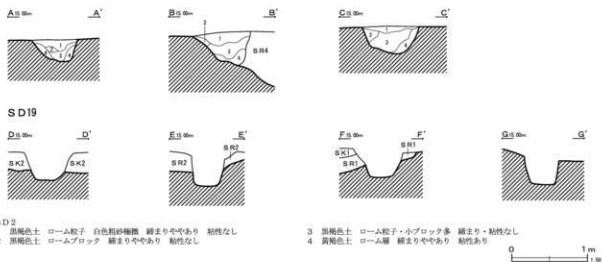
僅かに湾曲し、西側は攪乱されているが調査区域外へ延びていると考えられ、北東方向は途中から検出できていない。

規模は全長約3.3mが確認でき、幅0.45～0.60m、深さ0.09～0.14mを測る。溝底はほぼ平坦である。
第4号溝跡 (第32～35図)

F-2、G-1～3グリッドに位置する。L字状に屈曲し、南東部及び北東部で調査区域外へ延びる。第5号円形周溝墓・臺18号土壇・第14号溝跡と重複している。第5号方形周溝墓・第14号溝跡を切り、第18号土壇との先後関係は不明である。走行方向は南西部がN-36°-Wを指し、屈曲して北西部でN-53°-E方向を指す。規模は



第29図 溝跡(1)



第30図 溝跡(2)

全長約23.8mが確認でき、幅0.5～1.05m、深さ0.62～0.89mを測る。溝底は、北西部はほぼ平坦であるが、屈曲した南西部は南東に向かい高くなる。

遺物は、円筒埴輪と陶器鉢が出土した。

第5号溝跡(第34・35図)

H-2グリッドに位置する。両端が第16号土壇・第8号溝跡と重複し、先後関係は不明である。走行方位はN-45°-Eを指す。規模は全長約2.0mが確認でき、幅0.50～0.55m、深さ0.1mを測る。溝底はほぼ平坦である。

遺物は、円筒埴輪と図示できないが土師器片が出土した。

第6号溝跡(第32・33図)

G・H-2グリッドに位置する。第14号溝跡・ピット15・53と重複している。ピット15には切られているが、他との先後関係は不明である。走行方位はN-56°-Eを指す。規模は全長約5.0mが確認でき、幅0.95～1.20m、深さ0.36～0.40mを測る。溝底はほぼ平坦である。

第7号溝跡(第32・33図)

G-2・3グリッドに位置する。第14号土壇・第4号溝跡と重複している。第14号土壇に切られ、第4号溝跡との先後関係は不明である。走行方位

はN-38°-Eを指す。規模は全長約10.5mが確認でき、幅0.4～0.6m、深さ0.11～0.24mを測る。溝底はほぼ平坦である。

第8号溝跡(第34図)

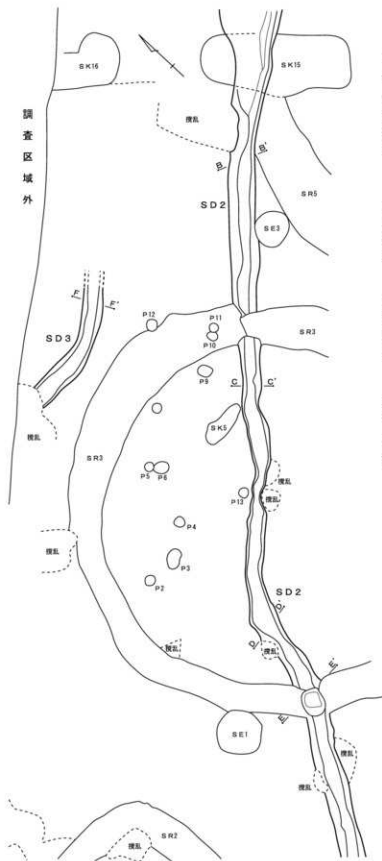
H-1・2グリッドに位置する。北西側は調査区域外へ延びている。第10・12号土壇、第5号溝跡、ピット92と重複する。第10号土壇を切り、他の遺構との先後関係は不明である。走行方位はN-26°-W方向を指す。規模は全長約5.4mが確認でき、幅1.05m、深さ0.4mを測る。溝底はほぼ平坦である。

第9号溝跡(第32・33・35図)

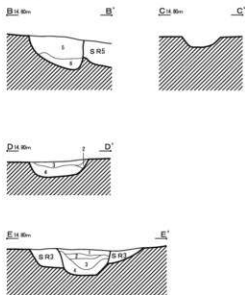
F・G-3グリッドに位置する。調査区を横断し、北西側は攪乱され、南東側は調査区域外へ延びている。第5号方形周溝墓・第2号井戸跡・第2号溝跡と重複している。第5号円形周溝墓・第2号溝跡を切り、第2号井戸跡に切られている。走行方位はN-43°-Wを指す。規模は全長約9.9mが確認でき、幅0.65～0.75m、深さ0.19～0.39mを測る。方形周溝墓北西側が深く、南東側が浅い。溝底はほぼ平坦であるが、周溝墓北西側と南東側で0.3mの高低差がある。

遺物は、須恵器裏片が(第35図11)出土した。

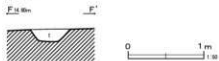
調査区域外



SD 2



SD 3

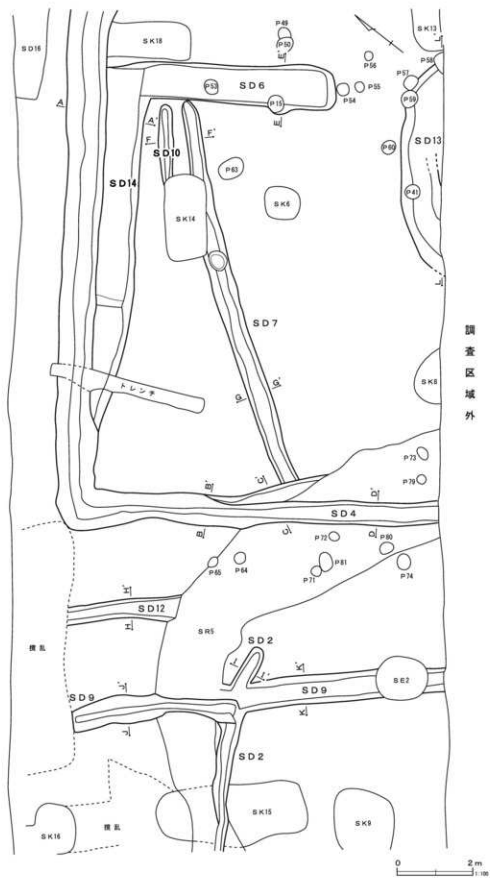


- SD 2
- 1 黒褐色土 ローム粒子 白色粗砂極微 締まりややみあり 粘性なし
 - 2 黒褐色土 ロームブロック 締まりややみあり 粘性なし
 - 3 黒褐色土 ローム粒子・小ブロック多 締まり・粘性なし
 - 4 黄褐色土 ローム層 締まりややみあり 粘性あり
 - 5 黒褐色土 ローム粒子・小ブロック多
 - 6 暗褐色土 ローム粒子・小ブロック多
- SD 3
- 1 灰黄褐色土 ロームブロック 締まりなし



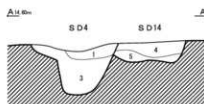
第31図 溝跡 (3)

調査区域外

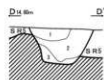
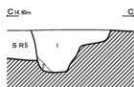
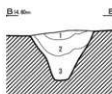


第32図 溝跡(4)

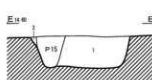
SD 4・14



SD 4



SD 6



SD 7・10



SD 7



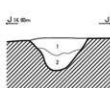
SD 12



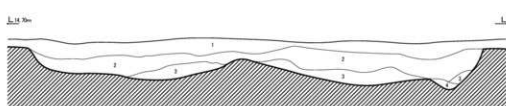
SD 2



SD 9



SD 13



0 1m

SD 4・14

- 1 灰褐色土 灰褐色土
2 黒褐色土 ローム粒子・炭土粒子微
3 暗褐色土 粘まりやや強
4 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少
5 暗褐色土 粘まりやや強
6 暗褐色土 ロームブロックやや多

SD 6

- 1 暗褐色土 ロームブロックやや多
2 黒褐色土 ローム粒子多
3 暗褐色土 ロームブロック微

SD 7

- 1 暗褐色土 ローム粒子少 カーボン微 粘まり弱
2 暗褐色土 ローム粒子少

SD 12

- 1 黒褐色土 カーボン微 粘まり弱
2 暗褐色土 ローム粒子・カーボン微 粘まり弱
3 暗褐色土 ローム粒子やや多

SD 2

- 1 黒褐色土 ローム粒子 白色粗砂微
2 暗褐色土 粘まりややあり 粘性なし
3 暗褐色土 ロームブロック 粘まりややあり 粘性なし

SD 9

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭土粒子微
2 暗褐色土 粘まりやや弱
3 暗褐色土 ローム粒子若干 粘まりやや弱

SD 13

- 1 黒褐色土 ローム粒子・灰褐色土ブロック少
2 暗褐色土 粘まり強
3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック少
4 暗褐色土 粘まりやや強
5 暗褐色土 ローム粒子多 粘まりやや強
6 暗褐色土 ローム粒子・ブロックやや多
7 暗褐色土 粘まりやや強

第33図 溝跡(5)

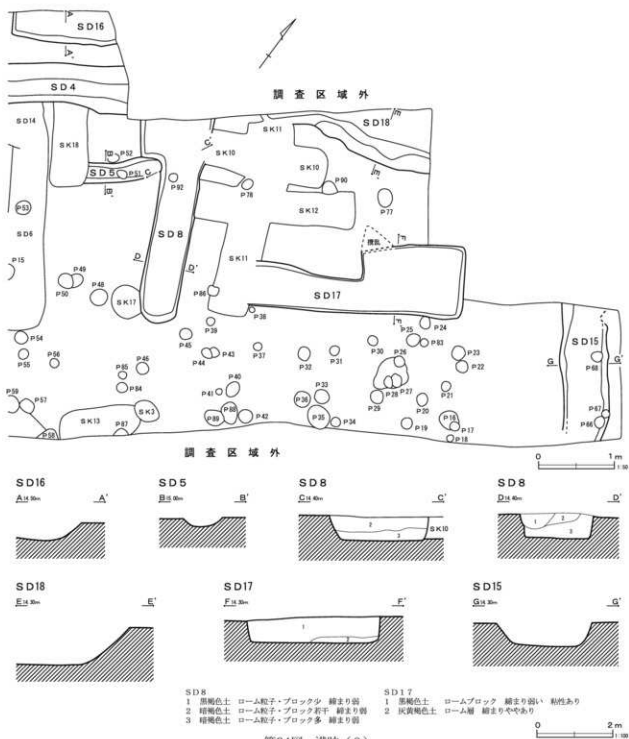
第10号溝跡(第32・33図)

G-2グリッドに位置する。南西部が第14号土塊と重複し、切られている。走行方位はN-50°-Eを指す。規模は全長約22mが確認でき、幅0.25~0.4m、深さ0.10~0.19mを測る。溝底は北東側が低くなる。

第11号溝跡(欠番)

第12号溝跡(第32・33図)

F-3グリッドに位置する。北西側は攪乱され、南東側は第5号方形周溝墓と重複する。走行方位はN-44°-Wを指す。規模は全長約30mが確認でき、幅0.46~0.64m、深さ0.17~0.25mを測る。溝底はほぼ平坦である。



第34図 溝跡(6)

第13号溝跡(第32・33図)

G-3、H-2・3グリッドに位置する。緩やかに湾曲し、ほとんどが南東部の調査区域外となっている。ビット57・59・87・91が壁際を掘りこんでいる。規模は全長約5.3mが確認でき、幅0.9～1.0m、深さ0.4mを測る。

遺物は図示できないが、陶器片が出土した。

第14号溝跡(第32・33図)

G-2グリッドに位置する。第4号溝跡に並走し、第6号溝と重複している。第4号溝跡に切られ、溝との先後関係は不明である。走行方位はN-59°-Eを指す。規模は全長約9.9mが確認でき、

幅1.1m、深さ0.27～0.42mを測る。溝底は南西部の段差から北東に向かい低くなっている。

第15号溝跡 (第34・35図)

I-1グリッドに位置する。調査区を横断するとみられる。ピット84・85・86と重複するが、先後関係は不明である。南東部は調査区域外へ延び、北西部は確認できなかった。走行方位はN-36°-Wを指す。規模は全長約35mが確認でき、幅1.17～1.30m、深さ0.31～0.38mを測る。溝底は平坦である。

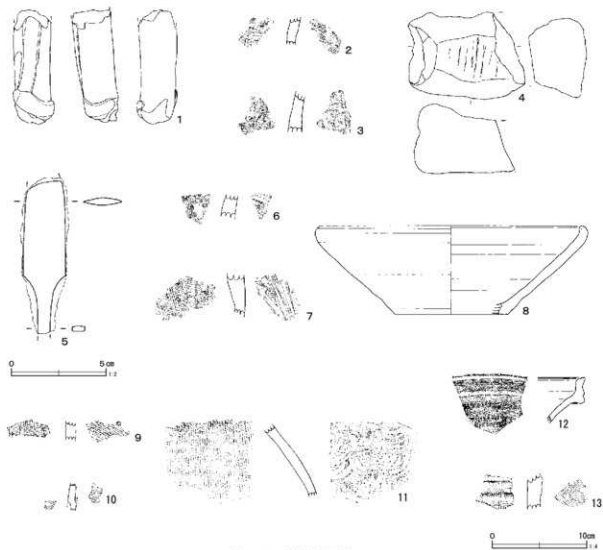
遺物は、陶器摺鉢と図示できないか陶磁器片が出土した。

第16号溝跡 (第34図)

G-1・2グリッドに位置する。北東部、北西部ともに調査区域外へ延びる。走行方位は長辺を基準とするとN-58°-Eを指す。規模は全長約2.58m、幅0.9mが確認でき、深さ0.25mを測る。溝底は平坦である。

第17号溝跡 (第34図)

H-1・2、I-1グリッドに位置する。L字状を呈し、第11号土壇と重複しているが先後関係は不明である。走行方位はN-59°-Eを指す。規模は全長約5.6mが確認でき、幅0.9～1.2m、深さ0.36mを測る。突出部は、長さ2.15m、幅0.8m～1.2mを測る。溝底は突出部のある方向に向



第35図 溝跡出土遺物

第10表 溝跡出土埴輪観察表 (第35図)

番号	種別	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	出土位置	備考
1	形象	赤白礫	良好	橙			SD 2	粘土組により麗手を表現
2	円筒	白砂	良好	にぶい赤褐	タテハケ 6本/1.0cm	ヨコハケ 9本/1.3cm	SD 2	
3	円筒	白砂	普通	橙	タテハケ 15本/1.4cm	タテハケ	SD 2	
6	円筒	赤	良好	橙	タテハケ 13本/1.5cm	ヨコハケ 14本/1.3cm	SD 4	
7	不明	赤白礫	良好	にぶい橙	ハケ 4本/0.6cm	ハケ 6本/0.9cm	SD 4	
9	不明	赤白黒	良好	明赤褐	タテハケ・ナデ 4本/0.7cm	斜めハケ 8本/1.5cm	SD 5	タテハケ単位は不明
10	不明	赤白	良好	にぶい赤褐	タテハケ 6本/1.0cm	タテハケ 11本/1.0cm	SD 5	タテハケ単位は不明
13	円筒	赤白	良好	橙	タテハケ・横ナデ 8本/1.5cm	ヨコハケ 8本/1.2cm	SD 19	突帯低いM字 幅2.0cm

第11表 溝跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	遺構	種別	器種	産地	残存 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	軸装飾	整形技法	器種・器形の特徴	文様	備考
8	SD 4	土器	鉢		25	(28.8)	9.3	(12.1)	灰黄		横ナデ			
12	SD 15	陶器	摺鉢	京・信楽	5				赤褐	踏輪	轆轤		印目8本/1条	軸口縁部外面・内面 18Cか

かって緩やかに低くなる。

第18号溝跡 (第34図)

H-1グリッドに位置する。北西部、北東部ともに調査区域外となる。第11号土壇と重複しているが、先後関係は不明である。走行方位はN-75°-Eを指す。規模は全長約4.6m、幅1.7mが確認でき、深さ0.5mを測る。

第19号溝跡 (第29・30・35図)

C-5、D-5・6グリッドに位置する。調査区を横断し、北西部は調査区域外に延び南東側は

第2号溝と接続する。第1・2号方形周溝墓・第2号土壇と重複し、第2号土壇を壊し、両周溝墓ともに周溝床面を掘り込んでいる。第2号溝との先後関係は不明である。走行方位はN-44°-Wを指す。規模は全長約128mが確認でき、幅33~50m、深さ0.15~0.30mを測る。溝底はほぼ平坦である。

遺物は円筒埴輪片と、図示できないか陶磁器片が出土した。

5. ビット

ビット1 (第36図)

B-7グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。主軸方位は、N-63°-Eを指す。規模は長軸37cm、短軸30cm、深さ25cmを測る。

ビット2 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径28cm×32cm、深さ37cmを測る。

ビット3 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。主軸方位は、N-62°-Eを指す。規模は長軸56cm、短軸35cm、深さ33cmを測る。

ビット4 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は27cm×28cm、深さ12cmを測る。

ビット5 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は円形である。ビット6の北西側に接している。規模は径23cm×24cm、深さ18cmを測る。

ビット6 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。ビット5の南東側に接している。主軸方位は、N-42°-Wを指す。規模は長軸41cm、短軸33cm、

深さ13cmを測る。

ビット7

E-4グリッドに位置する。攪乱を受け北西側の外周のみの検出である。平面形・規模は不明である。

ビット8 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径24cm×28cm、深さ21cmを測る。

ビット9 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-20°-Wを指す。規模は長軸38cm、短軸27cm、深さ45cmを測る。

ビット10 (第36図)

E-4グリッドに位置する。第3号円形周溝墓の北東側の溝底に検出され、ビット11の東側に接している。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-30°-Wを指す。規模は長軸29cm、短軸22cm、深さ21cmを測る。

ビット11 (第36図)

E-4グリッドに位置する。第3号円形周溝墓の北東側の溝底に検出され、ビット10の西側に接している。平面形は円形である。規模は径25cm、深さ51cmを測る。

ビット12 (第36図)

E-3グリッドに位置する。第3号円形周溝墓の北側周溝外周に接している。平面形は円形である。規模は径31cm×33cm、深さ49cmを測る。

ビット13 (第36図)

E-4グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径26cm×29cm、深さ5cmを測る。

ビット14 (第36図)

E-5グリッドに位置する。第3号円形周溝墓の東側周溝内周に接している。平面形は円形である。規模は径35cm×36cm、深さ15cmを測る。

ビット15 (第36図)

H-2グリッドに位置する。第6号溝跡の南西辺と重複し、溝を切っている。平面形は円形である。

主軸方位は、N-30°-Wを指す。規模は径42cm×47cm、深さ57cmを測る。

ビット16 (第36図)

I-2グリッドに位置する。南東側にビット17が隣接している。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-57°-Eを指す。規模は長軸27cm、短軸22cm、深さ22cmを測る。

ビット17 (第36図)

I-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN-38°-Eを指す。規模は長軸28cm、短軸23cm、深さ32cmを測る。

ビット18 (第36図)

I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径18cm×20cm、深さ17cmを測る。

ビット19 (第36図)

I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径29cm×30cm、深さ26cmを測る。

ビット20 (第36図)

I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径31cm×34cm、深さ32cmを測る。

ビット21 (第36図)

I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径24cm×27cm、深さ18cmを測る。

ビット22 (第36図)

I-2グリッドに位置する。ビット23が北西側に隣接する。平面形は円形である。規模は径33cm、深さ25cmを測る。

遺物は図示できないが、埴輪片が出土した。

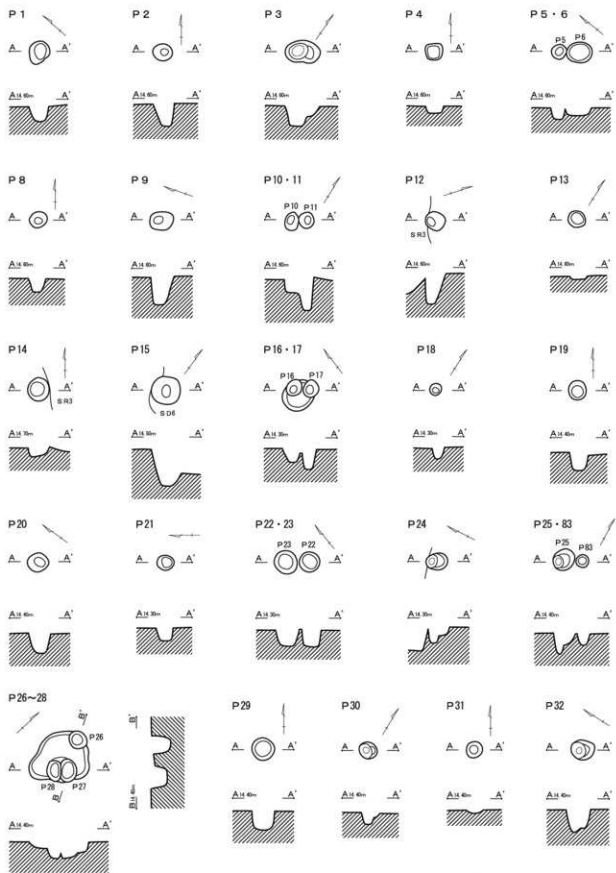
ビット23 (第36図)

I-2グリッドに位置する。ビット22が南東側に隣接する。平面形は円形である。規模は径36cm、深さ26cmを測る。

遺物は図示できないが、土師器片が出土した。

ビット24 (第36図)

I-2グリッドに位置する。第17号溝跡の南東辺に接する。平面形は楕円形である。規模は長軸34cm、短軸27cm、深さ25cmを測る。



第36図 ビット (1)

ビット25 (第36図)

H・I-2グリッドに位置する。ビット83が東側に隣接する。平面形は楕円形である。主軸方位は、 $N-35^{\circ}-E$ を指す。規模は長軸37cm、短軸32cm、深さ34cmを測る。

ビット26 (第36図)

H・I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径28cm、深さ29cmを測る。

ビット27 (第36図)

H・I-2グリッドに位置する。ビット28が南西側に接している。平面形は楕円形である。主軸方位は、 $N-48^{\circ}-W$ を指す。規模は長軸31cm、短軸25cm、深さ27cmを測る。

ビット28 (第36図)

H・I-2グリッドに位置する。ビット27が北東側に接している。平面形は楕円形である。主軸方位は、 $N-50^{\circ}-W$ を指す。規模は長軸33cm、短軸21cm、深さ27cmを測る。

ビット29 (第36図)

H・I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径29cm、深さ27cmを測る。

ビット30 (第36図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径29cm、深さ18cmを測る。

ビット31 (第36図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。主軸方位は、 $N-35^{\circ}-W$ を指す。規模は径25cm、深さ5cmを測る。

ビット32 (第36図)

H-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸31cm、短軸31cm、深さ37cmを測る。

ビット33 (第37図)

H-2グリッドに位置する。ビット36が南西側に隣接している。平面形は円形である。規模は径38cm、深さ32cmを測る。

ビット34 (第37図)

H・I-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径22cm×25cm、深さ17cmを測る。

ビット35 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径59cm×64cm、深さ36cmを測る。

ビット36 (第37図)

H-2グリッドに位置する。ビット33が南東側に隣接している。平面形は円形である。規模は径42cm、深さ26cmを測る。

ビット37 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径21cm×23cm、深さ11cmを測る。

ビット38 (第37図)

H-2グリッドに位置する。西に第11号土壇、北に第17号溝跡が隣接する。平面形は円形である。規模は径14cm×15cm、深さ26cmを測る。

ビット39 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径22cm、深さ13cmを測る。

ビット40 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位は、 $E-0^{\circ}$ を指す。規模は長軸43cm、短軸33cm、深さ32cmを測る。

ビット41 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径16cm、深さ10cmを測る。

ビット42 (第37図)

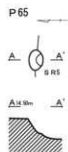
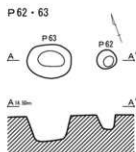
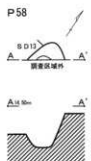
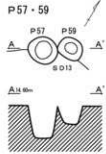
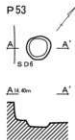
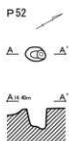
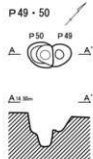
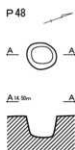
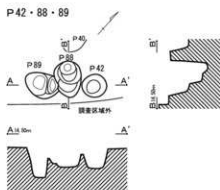
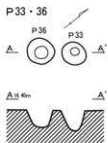
H-2グリッドに位置する。ビット88が南西側に隣接する。平面形は円形である。規模は径37cm、深さ33cmを測る。

ビット43 (第37図)

H-2グリッドに位置する。ビット44が南西側に接する。平面形は円形である。規模は径26cm、深さ35cmを測る。

ビット44 (第37図)

H-2グリッドに位置する。ビット43が北東側に接する。平面形は円形である。規模は径32cm、



第37図 ビット (2)



深さ37cmを測る。

ビット45 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径33cm、深さ29cmを測る。

ビット46 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径34cm、深さ27cmを測る。

ビット47 (欠番)

ビット48 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-35°-Eを指す。規模は長軸47cm、短軸42cm、深さ34cmを測る。

ビット49 (第37図)

H-2グリッドに位置する。南西側でビット49と重複している。平面形は楕円形を呈すると推定される。主軸方位は、N-42°-Eを指す。規模は長軸30cmのみ確認でき、短軸は35cm、深さ24cmを測る。

ビット50 (第37図)

H-2グリッドに位置する。南東側でビット49と重複している。平面形は楕円形と推定される。主軸方位は、N-52°-Eを指す。規模は長軸40cmのみ確認でき、短軸40cm、深さ50cmを測る。

ビット51 (第37図)

H-2グリッドに位置する。第5号溝跡内にあり、平面形は楕円形である。主軸方位は、N-81°-Eを指す。規模は長軸28cm、短軸22cm、深さ39cmを測る。

ビット52 (第37図)

H-2グリッドに位置する。第5号溝跡の北西辺に接する。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-29°-Eを指す。規模は長軸32cm、短軸22cm、深さ32cmを測る。

ビット53 (第37図)

G・H-2グリッドに位置する。第6号溝跡内にある。平面形は円形である。規模は径37cm、深さ38cmを測る。

ビット54 (第37図)

H-2グリッドに位置する。第6号溝跡の南東辺に接する。平面形は円形である。規模は径35cm、深さ27cmを測る。

ビット55 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径29cm、深さ24cmを測る。

ビット56 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径25cm、深さ29cmを測る。

ビット57 (第37図)

H-2グリッドに位置する。第13号溝跡の北辺と重複している。ビット59と東側で接している。平面形は円形である。規模は径35cm×38cm、深さ28cmを測る。

ビット58 (第37図)

H-2グリッドに位置する。南東部は調査区域外となっている。第13号溝跡の北端辺にある。平面形は不明である。確認できた規模は南北27cm、東西56cm、深さ56cmを測る。

ビット59 (第37図)

H-2グリッドに位置する。第13号溝跡の北辺と重複している。ビット57と西側で接している。平面形は円形である。規模は径42cm×46cm、深さ51cmを測る。

ビット60 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径34cm×39cm、深さ26cmを測る。

ビット61 (欠番)

ビット62 (第37図)

G-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径30cm、深さ23cmを測る。

ビット63 (第37図)

G-3グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN-69°-Wを指す。規模は長軸68cm、短軸53cm、深さ40cmを測る。

ビット64 (第37図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓の周溝底面にある。平面形は円形である。規模は径30cm×32cm、深さ9cmを測る。

ビット65 (第37図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓の周溝外周と重複している。平面形は楕円形である。規模は長軸32cm、短軸22cm、深さ23cmを測る。

ビット66 (第38図)

I-1グリッドに位置する。第15号溝跡の溝底にあり、ビット67が北側に接している。平面形は円形である。規模は径27cm×32cm、深さ18cmを測る。

ビット67 (第38図)

I-1グリッドに位置する。第15号溝跡の北東辺際にある。ビット66が南側に接している。平面形は円形である。規模は径21cm、深さ46cmを測る。

ビット68 (第38図)

I-1グリッドに位置する。第15号溝跡の溝底にある。平面形は円形である。規模は径28cm×32cm、深さ20cmを測る。

ビット69・70 (欠番)**ビット71 (第38図)**

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓周溝のやや浅くなったテラス状の内周側にあり、ビット81が南東側に接している。平面形は円形である。規模は径29cm、深さ18cmを測る。

ビット72 (第38図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓の周溝内周側斜面にある。平面形は円形である。規模は径24cm×28cm、深さ37cmを測る。

ビット73 (第38図)

G-3グリッドに位置する。第5号方形周溝墓の溝底外周にある。平面形は不整楕円形である。主軸方位は、N-9°-Eを指す。規模は長軸34cm、短軸25cm、深さ25cmを測る。

ビット74 (第38図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓の溝底にある。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-42°-Eを指す。規模は長軸44cm、短軸36cm、深さ47cmを測る。

ビット75・76 (欠番)**ビット77 (第38図)**

H-1グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-41°-Wを指す。規模は長軸50cm、短軸39cm、深さ24cmを測る。

ビット78 (第38図)

H-1・2グリッドに位置する。第11号土壌の南西辺の墳底にある。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-24°-Eを指す。規模は長軸31cm、短軸25cm、深さ26cmを測る。

ビット79 (第38図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓の周溝溝底にある。平面形は円形である。規模は径25cm、深さ10cmを測る。

ビット80 (第38図)

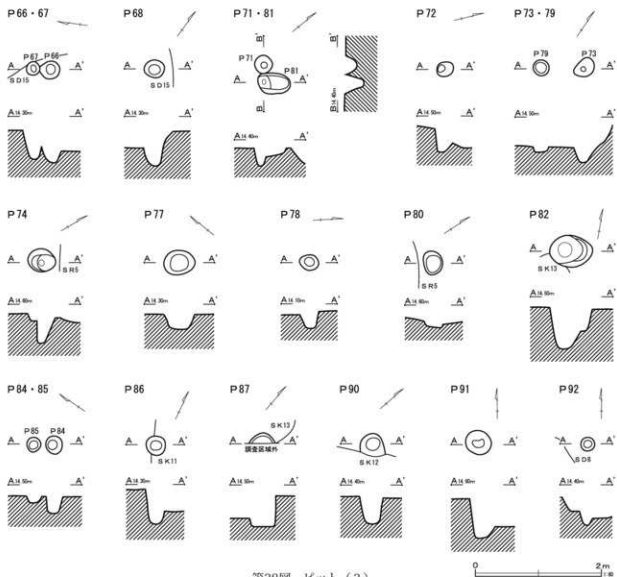
G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓周溝のやや浅くなったテラス状の内周側にある。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-71°-Wを指す。規模は長軸38cm、短軸30cm、深さ12cmを測る。

ビット81 (第38図)

G-3グリッドに位置する。第5号円形周溝墓周溝のやや浅くなったテラス状の内周側にあり、ビット71が北西側に接している。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-40°-Eを指す。規模は長軸50cm、短軸32cm、深さ29cmを測る。

ビット82 (第38図)

H-2グリッドに位置する。第13号土壌の北東端と重複している。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-77°-Eを指す。規模は長軸80cm、短軸50cm、深さ67cmを測る。



第38図 ピット (3)

ピット83 (第36図)

H-2グリッドに位置する。ピット25が西側に隣接する。平面形は円形である。規模は径20cm×22cm、深さ18cmを測る。

ピット84 (第38図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径28cm×30cm、深さ27cmを測る。

ピット85 (第38図)

H-2グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径23cm、深さ10cmを測る。

ピット86 (第38図)

H-2グリッドに位置する。第11号土塊の西辺

南部で重複する。平面形は円形である。規模は径30cm、深さ54cmを測る。

ピット87 (第38図)

H-2グリッドに位置する。第13号土塊北東部の墳底にあり、南東側は調査区域外となっている。平面形は不明である。確認できた規模は径41cm、深さ62cmを測る。

ピット88 (第37図)

H-2グリッドに位置する。ピット89が南西側にあり重複し、先後関係は不明である。ピット42が北東側に隣接する。平面形は楕円形である。主軸方位は、N-40°-Wを指す。規模は長軸57cm、

短軸47cm、深さ59cmを測る。南東壁は階段状に深くなる。

ビット89 (第37図)

H-2グリッドに位置する。平面形は楕円形である。主軸方位はN-83°-Eを指す。規模は長軸55cm、短軸41cm、深さ47cmを測る。

ビット90 (第38図)

H-1グリッドに位置する。第12号土壌の北西辺北東部で重複する。平面形は不整形である。

6. グリッド出土遺物

(1) 縄文時代

出土土器 (第39図1～58)

縄文時代の土器は、方形周溝墓の周溝などから、早期から後期の土器片が検出された。そのうちでは、後期の土器群が主体を占めて出土した。

第I群土器 (第39図1・2)

早期前葉の捻糸文系土器群を一括する。

第39図1は口縁部の破片で、口唇部の外側と内側に帯状に単節LRの縄文を施している。口縁部には条の向きを横にするよう単節LRの縄文を施している。第39図2は胴部の破片で、単節LRを条の向きを縦にするように施文している。井草I式と考えられる。

第II群土器 (第39図3～6)

前期の土器群を一括する。

第39図3・4は繊維を含む黒浜式土器である。胴部の小破片で、地文は無節Lの縄文を施文している。

第39図5・6は諸磯c式土器である。器面には集合沈線文を矢羽状に多段に施文している。

第III群土器 (第39図7～15)

前期終末から中期初頭の土器群を一括する。

第39図7～9は平行沈線を施文するものである。7は沈線による区画内に、格子目状に沈線を施文している。地文として8は単節LR、9は単節RLの縄文を横方向に施文している。第39図

規模は径38cm×43cm、深さ42cmを測る。

ビット91 (第38図)

H-3グリッドに位置する。第13号溝の北西部の壁際にある。平面形は円形である。規模は径39cm×41cm、深さ62cmを測る。

ビット92 (第38図)

H-2グリッドに位置する。第8号溝の北西部の溝底にある。平面形は円形である。規模は径21cm×23cm、深さ18cmを測る。

10～13は地文のみが施文されるもので、端部を結節する単節LRの縄文を縦方向に施文している。第39図14・15は口縁部で、口唇部直下には刻みか施文されている。

第IV群土器 (第39図16～19)

中期後葉の土器群を一括する。

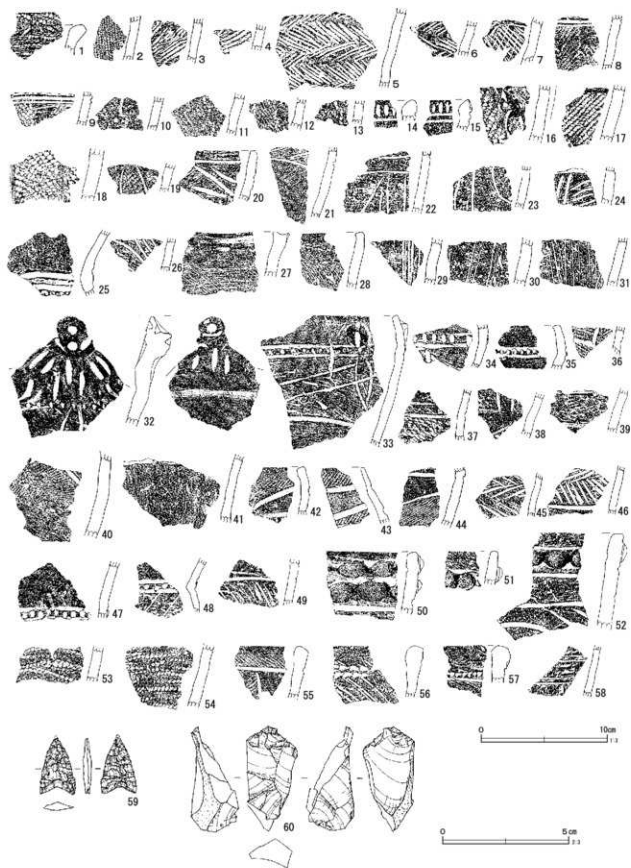
第39図16は胴部の破片で、蛇行する隆帯を貼付している。地文として単節RLの縄文を縦方向に施文している。第39図17・18は沈線または隆帯が施文される胴部の破片で、17は単節RL、18は複節LRの縄文を縦方向に施文している。第39図19は逆V字状に施文する沈線内に単節RLの縄文を充填している。

第V群土器 (第39図20～58)

後期の土器群を一括する。グリッド出土土器の主体となる時期である。

第39図20～31は後期前葉の堀之内I式である。20～24、26は沈線によって文様を施文する土器で、地文は施文されない。25は屈曲する括れ部分の破片で、括れ部には平行沈線文を巡らし口縁部と胴部を区画している。27～31は粗製の深鉢形土器で、地文として櫛歯状工具による条線を施文している。

第39図32～54は後期中葉の加曾利B2式である。32～41は3単位の把手を有する深鉢形土器の破片である。32は把手部分で、内外面に括弧状



第39図 グリッド出土遺物(1)

の沈線を施文している。33～35は内傾する口縁部の破片で、平行する2本の沈線間に列点を施文している。33は32と同一個体の把手間部分で貼付文が施されている。36～41は胴部の破片で、36・37は単節R L、38は捺痕、39は無節L、40は単節R Lを地文として施文している。42～46はいわゆる算盤玉の形状の鉢形土器である。42・43は口縁部の破片で、沈線間に単節L Rの縄文を施文する。44～46は胴部の破片で、44は沈線間に無節Lの縄文、45・46は矢羽状の沈線を施文している。47～49は胴部が張り、括れ部から口縁部に直線的に外傾する器形で、47・48は括れ

部分、49は胴部の破片である。50～54は粗製の紐線文土器の破片である。

第39図55～58は後期後葉の安行式土器である。55は口縁部の破片で、口縁部には単節R Lの縄文を帯状に施文している。56～58は粗製の紐線文土器の破片である。

出土土器 (第39図59・60)

第39図59は無茎の石甌である。基部には浅い抉りが入る。長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.9gで石質はチャートである。

第39図60は黒曜石製の剥片である。長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ1.9cm、重さ7.9gである。

(2) 古墳時代、中・近世以降 (第40図)

古墳時代の埴輪と中・近世の土器・陶器・磁器や石器が出土した。第2号方形周溝墓の北側と方台部が後世の攪乱を受けていたことに起因するものとみられ、D-4・5グリッドから多数の遺物を検出した。

古墳時代は、形象埴輪の破片で12は不明であるが、13は馬形埴輪の脚部と見られる。14は馬形埴輪の右側の尻繫で粘土紐によって尻繫を表現している。第40図14の右側が腹部分である。

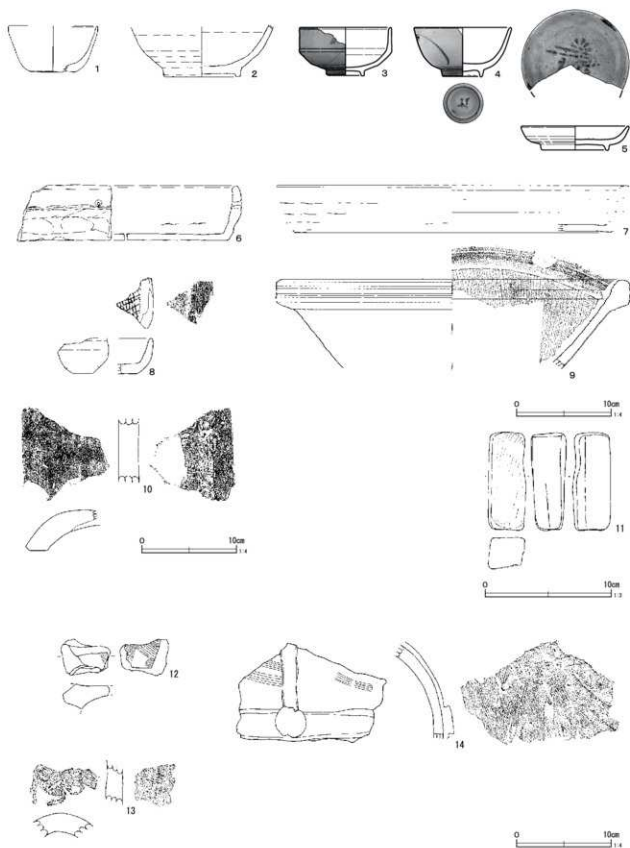
陶磁器類は、18世紀を中心としたものが出土している。

第12表 グリッド出土遺物観察表 (第40図)

番号	遺構	種別	器種	産地	残存 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	釉薬装飾	整形技法	器種・器形の特徴	文様	備考
1	D4・E3	土器	甌			30 (9.5)	4.8	4.7	橙		轆轤			器面風化
2	D-4	陶器	鉢	瀬戸・美濃	20		(5.3)	8.0	灰黄	透明釉	轆轤	削り出し高台		見込みトチン跡・砂粒 18C前か
3	D-5	磁器	碗	瀬戸・美濃	60	(9.8)	(5.1)	4.0	灰白	透明釉	轆轤	腰折碗		18C後葉～末
4	D-5	磁器	碗	肥前	40	(10.3)	5.25	4.2	灰白	透明釉	轆轤	削り出し高台	草花文 二重團縁 高台銘あり	見込み砂粒 貴付砂粒 18C後
5	D-5	陶器	皿	瀬戸・美濃	65	11.4	2.6	7.1	灰白	灰釉	轆轤	削り出し高台	草花文 絵軸	見込み円錐セン跡 18C中葉
6	D-4	土器	焙烙		10		5.8		灰白					
7	D-5	土器	焙烙		10	(37.4)	5.0	(33.6)	褐灰					
8	C-2	陶器	卸皿	瀬戸・美濃					淡緑	灰釉	轆轤			中世か
9	D4・E3	陶器	摺鉢	備前か	10	(37.4)	(9.5)		赤褐	鉄釉	轆轤	卸目12本/条		17C後～18C前
10	D-5		瓦						灰					
11	D・E-4	石器	砥石	長さ7.8	幅2.9	厚さ2.5	重さ108.5g							

第13表 グリッド出土埴輪観察表 (第40図)

番号	種別	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	出土位置	備考
12	形象	砂	良好	にぶい橙	タテハケ 単位不明	斜めハケ 7本/1.3cm	D-4	
13	形象	赤白	良好	にぶい橙	タテハケナデ消し 8本/0.9cm	ヨコナデ	—	脚部
14	形象	石白砂	良好	橙	ヨコハケナデ消し 6本/1.1cm 粘土紐による尻繫	タテハケ 14本/2.5cm	—	馬形埴輪尻繫部右側



第40図 グリッド出土遺物(2)

V 調査のまとめ

1. 安養寺古墳群の調査成果

安養寺古墳群は、大宮台地北東端から元荒川左岸の自然堤防上に位置する古墳群の総称である。南北約600m、東西約200mと広範囲に分布し、北端に愛宕神社古墳や安養寺南古墳、南端に八幡神社古墳がある。今回の調査区は古墳の空白域で、安養寺古墳群の新たな知見となる遺構・遺物が発見された。

調査の結果、古墳時代前期の方形周溝墓3基、後期の円形周溝墓2基が検出され、近世以降の遺構は、井戸跡3基、土壌15基・溝跡18条、ピット86基が検出された。方形周溝墓は調査区の中で最も高い位置にあり、円形周溝墓や方形区画がある北東部に向かって緩やかに傾斜している。

3基の方形周溝墓は、周溝が全周するタイプのもので、方台部は後世の擾乱を受けて盛り土は確認されなかった。

第1号方形周溝墓では唯一主体部が残存しており、主体部北東辺際に鉄製の短剣、北西端にはガラス小玉2点が副葬されていた。さらに周溝からは大型の壺2個体、中型の壺2個体、底部を穿孔した壺5個体、底部穿孔されていない壺1個体、甕2個体、高環1個体、ミニチュアの壺1個体、ミニチュアの鉢が1個体出土した。特に大型壺は、西コーナーと南コーナーに1個体と底部が穿孔された壺が近接した状態で出土している。東コーナーでは中型壺と高環・ミニチュアの壺が近接し、北コーナーでは、底部穿孔された中型壺と甕2個体が近接した状態で出土している。北東溝中央には底部穿孔されていない壺とミニチュア壺が出土している。このような出土状況は、土器を用いた葬送儀礼を考える上で参考になる事例である。

底部が穿孔された中型壺は、溝の一部のみが検出された第4号方形周溝墓からも出土した。周溝墓の大部分が調査区域外に広がっているため規

模・形状は不明であるが、第1号周溝墓と規模では同等のものと推定される。方形周溝墓では、土器の過多を問わなければすべて土器が出土している。

方形周溝墓群の北東側に、円形周溝墓が2基検出されているが、円形周溝墓はほぼ正円の形状で、方形周溝墓とは重複せずに方形周溝墓を避けるように配置されていた。円形周溝墓の北東側では周溝墓は確認できず、円形周溝墓が墓域の東端にあたとみられる。

円形周溝墓は方形周溝墓とは異なり、遺物は検出されなかった。第3号円形周溝墓の中央を近世以降とみられる第2号溝が横断し、第5号円形周溝墓の北端まで延びている。第2号溝の出土遺物は中・近世などの遺物もあるが、古墳時代の遺物が主体である。これは、近世以降に溝を開削して円形周溝墓を壊しながら掘られたことに起因し、溝が埋まる過程で遺物が混入したとみられる。

第2号溝の出土遺物は形象埴輪・円筒埴輪や柳葉式の鉄鏃、そして加工された角閃石安山岩が出土している。形象埴輪は武人埴輪の腕の部分で粘土紐により籠手を表現したとみられる。生出土遺跡の埴輪窯跡からも籠手を粘土紐で表現した武人埴輪が出土している。生出土遺跡の埴輪窯跡は、6世紀後半に盛行し、形成開始時期は6世紀前半代に遡ると捉えられている。

角閃石安山岩は加工痕が見られ、石室の構築材とみられるが、周辺では産出しておらず群馬県利根川流域茨川付近の大露頭のものとして推定され、利根川を下流して円礫となって小型化したものとは異なる。安養寺古墳群西方の箕田古墳群に箕田9号墳（宮登古墳）があり、この古墳は主体部が角閃石安山岩の切石切廻みの胴張りの横穴式石室である。石室内からは玉・鉄鏃・須恵器甕が出土し

ている。周辺の古墳群に同石材を用いた古墳群も存在することから、石室として角閃石安山岩を用いた後期古墳の存在を推定させる。

これらの第2号溝出土遺物は、古墳時代後期の遺物で円形周溝墓の遺物であろう。さらに墓域の東限であり他の古墳の遺物である可能性も低く、第3号円形周溝墓の遺物の蓋然性が高いと言える。

第5号円形周溝墓は、第9号溝に中央を横断されて壊されており、溝から出土した須恵器甕の破片は外面に平行叩き、内面に同心円文叩きを施したもので古墳時代後期のものである。

また、出土位置は不明であるが、馬形埴輪の尻繫部分が出土している。

2. 安養寺古墳群の位置付け

安養寺古墳群は、これまで墳丘の残存する愛宕神社古墳・安養寺南古墳・八幡神社古墳が確認され、これらの古墳からは埴輪が採取されている。埴輪以外にも弥生時代終末から古墳時代前期の土師器片も多く採取されており、その時代の遺構の存在が考えられていた。

古墳群の最も北に位置する愛宕神社古墳は径20m前後の円墳であり、円筒埴輪が出土され古墳時代前期の土器も採取されている。安養寺南古墳は、愛宕神社古墳の南西約60mにあり、長軸約80m、北東部に長さが約43mであり、円墳とも考えられるが墳丘の残っている状況から、北側が後円部で南側が前方部となる前方後円墳の可能性がある。円筒埴輪・形象埴輪と古墳時代前期の土師器が採取されている。古墳群南端に位置する八幡神社古墳は、円墳と考えられるが約東西45m、南北23mである。円筒埴輪・形象埴輪が採取されている。また、八幡神社古墳の隣接地からは鶏形埴輪の頭部から首の部分が発見されており、6世紀初頭前後の古墳の存在が推定される。

安養寺古墳群は、6世紀代の3基の円墳と今回

近世以降の遺構は、井戸跡3基、土壇15基・溝跡19条、ビット86基が検出された。一部の土壇からは陶磁器類が出土した。調査区東部では直角に屈曲する第4号溝跡が検出され、さらに北東へ第4号溝が延長し直角に屈曲して第15号溝に繋がることによって方形に区画されていると推定される。溝によって囲まれた部分から土壇やビットが検出されていることから、道沿いの屋敷地とそれに伴う区画溝や建物跡の一部と考えられる。

第9号溝・第12号溝・第19号溝は方形区画溝と方位が同一であることから、隣接する屋敷地との区画溝とすると、方形区画外に位置する井戸跡は隣接する屋敷地のものと考えられる。

新たに発見された方形周溝墓と円形周溝墓からなり、古墳時代前期および後期に墓域として使用されてきた。

安養寺古墳群を考える上で周辺の古墳群の様相をみてみることにする。

最も近い新屋敷遺跡は安養寺古墳群の南方約1kmに位置し、大宮台地が南西から北東へ緩く傾斜する斜面上にある。古墳は殆どが円墳で大半の古墳にはブリッジをもつ。第51号墳は周溝外形9mほどの小型の円墳ではあるが、周溝は全周し長方形の土壇状の主体部が確認されている。6世紀初頭を中心とした5世紀末から6世紀中頃の古墳群である。

生出土遺跡は新屋敷遺跡の南に位置し、住居跡・埴輪窯跡のほか古墳が検出されている。古墳はブリッジを持つ円墳で、新屋敷遺跡の古墳より新しいものとされている。埴輪窯跡は古墳時代後期のもので、15号窯跡から出土した武人埴輪は、前述の安養寺古墳群の第2号溝出土の籠手を粘土紐で表現した腕の部分と同類のものである。

箕田古墳群は大宮台地の北端部、安養寺古墳群

の西方約2.5kmにある。7号墳と9号墳（宮戸古墳）が切石切組積み、のり張型横穴式石室をもっており、9号墳は角閃石安山岩が用いられており、3号墳と7号墳では凝灰岩質砂岩が用いられ、石室床面は角閃石安山岩礫が敷かれている。6世紀後半を中心とした6世紀代の古墳群である。

周辺部の古墳群を概観してきたが、後期古墳群であり、安養寺古墳群のように方形周溝墓と円形周溝墓とが共存するような古墳群はないが、出土した埴輪と石室構築材に関し類似例がみられた。

次に、方形周溝墓・円形周溝墓および古墳が共存する遺跡についてみていくこととする。

袋・台遺跡（旧吹上町）は、方形周溝墓・円墳が検出された。方形周溝墓は6基で、周溝が全周するものと隅にブリッジを持つか、もしくは2～3辺で構成するものがある。また、2号方形周溝墓が3号方形周溝墓を切っている以外は、方形周溝墓の切り合いや共有はみられない。古墳は2基の円墳でいずれも方形周溝墓を壊して構築されている。1号墳からは円高埴輪・形象埴輪、環・高坏が出土し、2号墳はブリッジをもち、遺物は検出されなかった。方形周溝墓は弥生後期末から五領期後半、2号墳は和泉期後半とも捉えることができ、1号墳は鬼高期前期と捉えられ、前期及び後期は墓域となっている。

深谷市戸森松原遺跡は、古墳時代の周溝墓13基が検出され、方形が3基、円形が10基である。方形の第1号周溝墓と円形の第3号周溝墓は、第1号周溝墓埋没後に第3号周溝墓が構築されている。周溝墓は近接しているものの重複が認められず、存在を意識して構築されている。円形の周溝墓からの出土遺物では、和泉期の新段階から鬼高期の初頭、およそ5世紀の後半に位置づけられる。

殿山古墳・殿山遺跡は、方形周溝墓が3基と殿山古墳があり、方形周溝墓は間隔をおいて構築され、周溝墓の南側に殿山古墳が位置する。2基の方形周溝墓は五領期後半、第3号方形周溝墓は和

泉期の前半に位置づけられ、古墳がその後続く時期に位置づけられる。

戸田市南原遺跡は、方形周溝墓9基と円形周溝墓4基、古墳跡1基が検出されている。方形周溝墓は、近接し同じ主軸方向をしているもの、方形が丸みを帯びるもの、他の方形周溝墓を切っているものがある。円形周溝墓はブリッジを有するもので、方形周溝墓を切っている。方形周溝墓は五領期後半、円形周溝墓は鬼高期前半に位置づけられ、古墳跡は埴輪を有することからも後期古墳に位置づけられる。

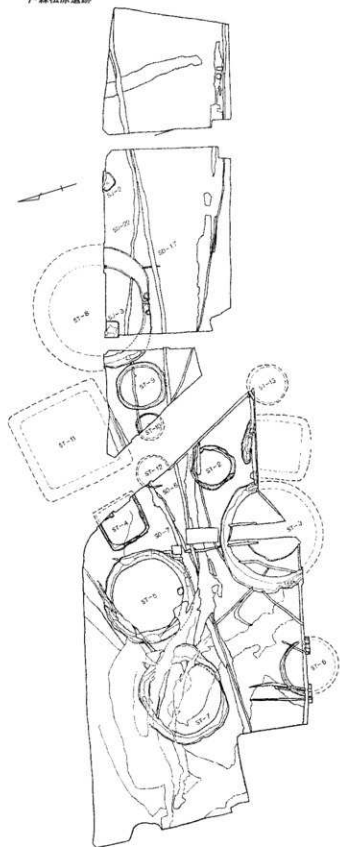
これまで方形周溝墓と円形周溝墓の共存する遺跡を概観してきたが、方形周溝墓と円形周溝墓および古墳が近接しているものの重複が認められず、存在を意識して構築されているのは殿山遺跡と戸森松原遺跡である。殿山遺跡は方形周溝墓から古墳への移行が窺える例である。

戸森松原遺跡は、方形周溝墓に土器がみられなかったものの、第1号周溝墓（方形）は第3号周溝墓（円形）に先行することが明らかであり、周溝墓築造が方形から円形へと変化する中で築造が中断した時期と大型の古墳が整備された時期が一致するということは、地域内で政治的・社会的再編成を経て、再び築造が開始されたと想定し、それぞれの墳墓を築いた集団は同一である（飼持1995）としている。

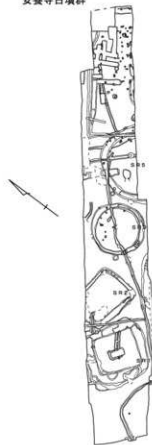
安養寺古墳群では、方形周溝墓に主体部棺床面が残存していたことから低墳丘が存在していた可能性が大きく、周溝墓の存在を意識して築造している。また、円形周溝墓を横断する近世以降の溝跡が古墳を壊し、埋没する際に古墳時代後期の遺物が流れ込んだと考えられる。

円形周溝墓は方形周溝墓と時期差があるが、再び同一集団によって構築された古墳時代後期の円墳跡とするほうが妥当と考える。

戸森松原遺跡



安養寺古墳群



0 50m 1:1000

第41図 周清墓配置図

3. 方形周溝墓について

安養寺遺跡からは、古墳時代前期の方形周溝墓3基が検出されている。ここでは安養寺遺跡の方形周溝墓について、周辺地域の例との比較から、遺構、遺物の位置づけを試みることにしたい。

出土土器 古墳時代前期の土器は、第1・4号方形周溝墓から出土したもののみである。これらは重複関係にはないが、壺の比較から新田として捉えることができる。遺跡のごく一部のみの調査であることから、古相(1号)、新相(4号)と仮称しておきたい。古相の第1号周溝墓からは良好なセットが出土している。球形胴に締りのある頸部、直線的に外反する複合口縁の大型壺、やや扁平な球形胴に締りのある頸部、大きく二重口縁風に外反する口縁部の中型壺、球形胴に直線的で長い口縁部が付く中型壺、球形胴に短く外体する口縁部が付く壺、小型壺、高環、鉢によって構成されている。これらは型式論的なまとまりを持っている。

新相の第4号周溝墓出土土器で、全形の知れるものは1の壺のみだが、1号の壺に比べて頸部の締りが弱く、胴部がやや長胴気味であることから1号より一段階新しくなるものと考えられる。また第19図2～4は同一個体の可能性があり、相当大型の壺の口縁部と考えられる。同様の例は未報告だが、宮代町山崎山遺跡で認められ、県東部に特徴的に分布する可能性がある。

これまで筆者は県内各所の遺跡の出土土器を検討してきた。本遺跡古相は蓮田市久台・ささら新段階(福田2007a)、橋本氏の伊奈町戸崎前2期(橋本1999)、東松山市反町古段階(福田2009)でも古相の部分に該当する。所謂協会シンボ編年(日本考古学協会1993)では7期に相当すると思われる。実年代は4世紀初頭～前葉としておきたい。

また、本周溝墓出土資料は10を除いて胎土や色調が共通しているが、更に法量、成形手法や調整が同じ土器の組み合わせが3とおり認められる。

①1・8(非穿孔) 複合口縁で球形胴を呈するも

のである。口縁部は直線的に外反し複合部の幅が広い。胴部は粘土の積み上げ単位が5段である。1には棒状浮文、円形浮文、円形朱文が施されるが、法量、器形、調整が非常に似通っており、所謂「対」の土器に近いものと考えられる。

②2・7・12+3(穿孔) やや扁平な球形胴に、長く大きく開く口縁部を持つ。2・7・12は口縁部の中位から、更に大きく水平方向に開き、二重口縁風になっている。法量、器形、調整が非常に似通っており、セットとして製作されたものと考えられる。同様に3は口縁部のみが直線的に外反する複合口縁で、棒状浮文が全周する。前の3個体と焼成、色調が共通し、胴部の成形も同様であることから、製作の同時性が窺える。14の壺とも調整方法が共通している。また、これらは底部全体をきれいに削り抜く形で焼成後穿孔が施されており、取り扱いも同様である。

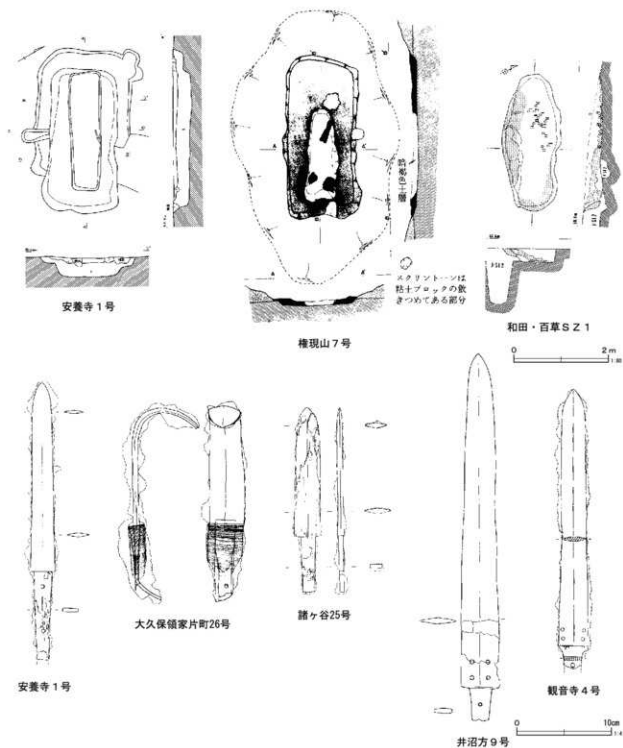
③13～15 器種や法量が異なるが、胴部の成形が同様であり、頸部の接合の様相が類似している。色調や焼成具合も共通し、製作の同時性が窺える。

また4・5・9は器種、器形ともに異なるが、調整の様相や色調、胎土の様相が共通している。特に5・9の調整も同様である。

方形周溝墓 方形周溝墓群の最大の特徴は、後述される円形(周溝)墓との群構成であろう。この点については2で述べられているのでここでは扱わない。だが、それを差し引いても、それぞれの周溝墓で軸方向が大きく異なる点は特徴的である。本調査では群の一部が検出されたのみで全容が詳らかではないが、今後の大きな課題といえよう。

また、平面形も1号は正方形、2号は長方形、周溝も前者は広く、後者は狭いといった違いが見られ、軸方向の違いとの関係が問題である。

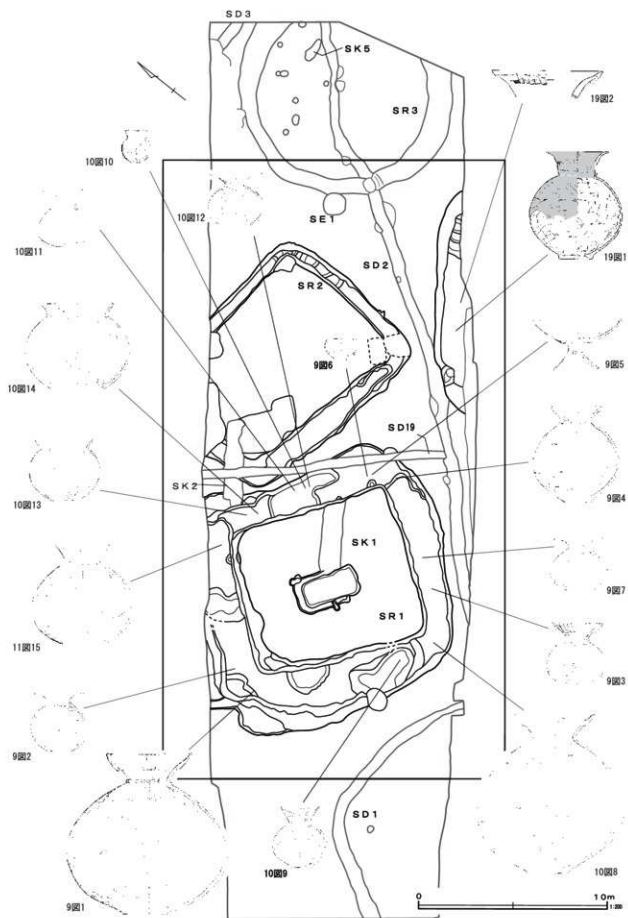
墓群の中で特に第1号周溝墓は、中心埋葬施設と副葬品が検出され、各周溝から底部穿孔壺が出土するなど県内でも屈指の良好な例である。



第42図 ローム塚、鉄剣の類例 (各報告書より転載)

中心埋葬施設は、大宮台地では上尾市薬師耕地前(赤石1978)、さいたま市上ノ宮(新屋・福田1999)、篠山(笹森紀1988)、上太寺(奥村・秦野1988)、関東(大谷1998)、井沼方(小倉1987、小倉・柳田2004)の各遺跡から検出されている。これら

は北北西から北西の軸方向で長方形、規模は長軸19～33m、短軸1.0～1.8m、深さ0.1～0.4mのものである。1号は主軸方向が北西、柵末面が長さ250m、幅65mで、この範囲に収まっている。本例の場合は、掘り方として35×20mのロームブ



第43図 安養寺古墳群の土器配置と出土土器

ロックが充填された土壌、ローム礫が設けられている点が最大の特徴であり、この掘り込みの規模を考慮に入ると大宮台地で最大になる。

同様の構造のものは大宮台地では確認されておらず、近隣では上福岡市権現山遺跡第7号周溝墓(笹森健1984)、東京都多摩市和田・百草遺跡S Z 1(桐生1986)が知られているのみである(第42図)。権現山7号は3.5×1.5mの不整な長方形の範囲にロームブロックが敷きつめられ、中央に1.87×0.58mの不整長方形の掘り込みが確認されている。和田・百草S Z 1例は2.85×1.20mの不整楕円形の掘り方の壁面に黒色土を混入するロームブロックが貼り付けられている。棺の痕跡等は確認されていない。礫のような施設はそれを用いる階層の存在を窺わせる。前者は方台部の規模が15.2m、後者は10.4mだが副葬品として石製丸玉が出土しており、方形周溝墓群中でも優位のものと考えられる。本遺跡1号の優位性を埋葬施設の構造の上でも示すものと言えよう。また江南町塩古墳群の諸ヶ谷25号(江南町1995)や出現期古墳の桶川市熊野神社古墳などでは粘土礫が採用されており、逆にローム礫はその簡易版とも言えるのかも知れない。両者の位置づけが問題である。同時に、今後系譜関係等も検討する必要がある。

副葬品としては剣とガラス玉が出土している。剣は現存長29.4cmの短剣である。埼玉県内では方形周溝墓からの出土例が4例知られている(第42図)。これらは大まかに、茎の長い大久保両家片町遺跡第26号例(山田ほか1996)、諸ヶ谷25号例、茎の短い井沼方遺跡第9号例、東松山市観音寺遺跡4号例(宮島1995)に分けられる。本遺跡例は前者と同様のものである。大久保両家片町例は柄の表面に糸が巻かれており、槍先の可能性も考えられる。諸ヶ谷例も、執文中で槍先の可能性が指摘されている。筆者はこれらの資料について実見しておらず、今後改めて検討することにした。

土器配置(第43図) 1号から出土した土器群には

出土位置、層位に一定のまとまりが見られる。

まず、出土層位については、東コーナーの高環・鉢が溝底から出土し、それ以外のもの(壺・甕)はいずれも中層もしくは確認面からの出土である。小型器種が溝底から出土し、それ以外の器種が上層から出土する様相は、県内でも井沼方遺跡などで認められる(福田2007a・b)。これは、土器使用に段階があることを示すものである(立花1996)。

平面的な位置関係は、北東溝、各コーナーに集中している。特に北東溝に集中しており、土器配置における「正面」と考えることができる。また、前述①の大型壺は南・西の各コーナーに配されており、それと組み合わせになる形で底部穿孔の中型壺が出土している点の特徴的である。前述②の中型壺は北東溝、南東溝の中央、西コーナーに分けられて置かれている。前述③の甕、中型壺は北コーナーに配されている。

以上のように、セットとして製作されたと考えられる土器群が周溝の各所に分けて配置されている。その使用される具体的な儀礼像は不明だが、北東溝の中・小型壺を中心とする配置と、南側の大型壺を中心とする配置の対照的な様相は、大きな示唆を与えるものと言えよう。方形周溝墓におけるこうした大型壺を用いた儀礼行為については県内各所で認められることが、林沼幹氏(林沼2006)などの指摘からも明らかになっている。今後他遺跡の様相も含めて検討を進めることにより、具体的な儀礼像を描くことができるものと考えられる。

以上、第1号方形周溝墓を中心に若干の検討を試みた。良好な例であるだけに課題の列挙となってしまう、意を尽くす事ができなかった。方形周溝墓群としての検討も今後の周辺の調査次第では必要になってくるであろう。後考を期すことにしたい。

4. 中近世

調査区内における中近世の様相について小考する。検出された遺構の種類は、溝跡・井戸跡・土壇・およびピットである。これらの遺構が検出されているのは、第2号・第19号溝跡、第1号井戸跡を除いて、主に調査区の北半部である（第44図参照）。

遺構について 全体的な傾向として、溝跡と土壇の方位は、北西-南東方向と、これに概ね直行する南西-北東方向を示し、プランは直線状を呈している。各遺構の同事性については不明であるが、方位に関しては、多くの遺構がこの基準を踏襲していると考えられる。続いて、この方位を規定している要因を考えてみたい。

今回の調査地点の北西約250mには、安能寺という寺院が存在している。区画溝をもつ屋敷地と考えられる遺構は、この安能寺の脇を通過する道（以下は便宜上、街道と呼ぶ）に北面している。この街道に沿って掘られた溝（第15号溝跡）は、90度ずつ振ることによって（第4号溝跡）、方形または長方形に屋敷地を区画していると推定される。この区画内の溝跡や土壇の多くは、東西幅25m程の規模をもつこの屋敷地に帰属するものであり、ピットは建物や柵の痕跡と推定される。調査時の所見として、ピットの分布状況から、上記の方位に則って分布していると考えたが、残念ながら掘立柱建物跡または柵跡などの遺構として、結線するには至らなかった。長方形を呈する大型土壇については、空跡か地下式坑ではないかと考えられる。また、区画外の溝跡や土壇の中にも、この方位をもつものがある。逆の見方をすれば、この方位と異なり、プランが湾曲する遺構（第1～3号・第7号・第13号溝跡など）は、時間的にも異なる可能性が考えられる。

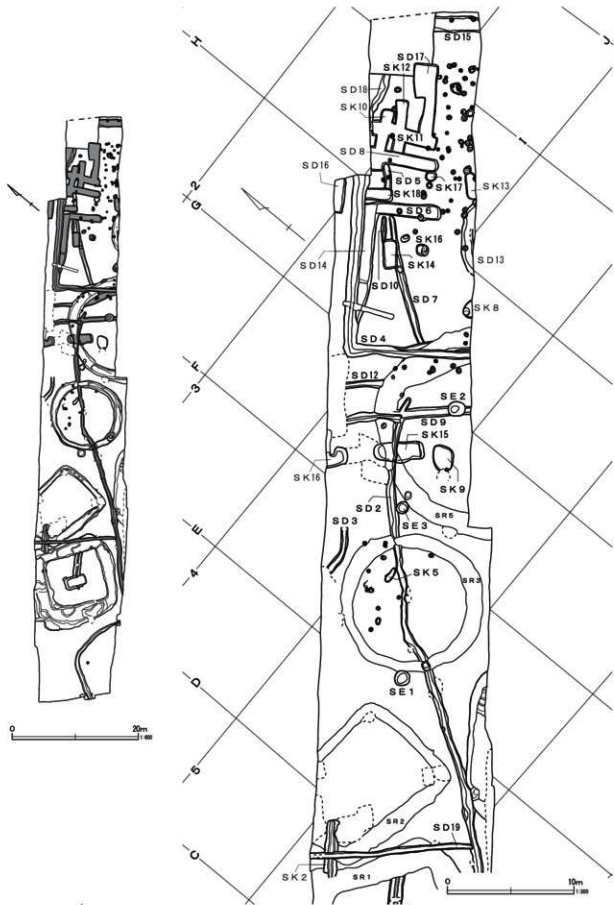
次に第19号・第9号溝跡については、既に述べたように、方位的に区画溝である第4号溝跡と平行しており、第12号溝跡もほぼこれに近い。第

19号溝跡と第9号溝跡は34mの距離（第12号溝跡では37m）にあるが、この間には2基の井戸跡（第1号・第3号井戸跡）が検出されており、さらに第15号土壇は溝跡に平行する。これらの点から、第15号・第4号溝跡による区画された屋敷地と、隣り合う屋敷地の可能性を指摘しておきたい。

立地について 古墳群名の由来となっている安養寺は地名としては存在するが、この名をもつ寺院は現存しない。新編武蔵風土記稿（以下、風土記稿）には、「當村に古安養寺と唱えし寺院ありし故、村名となりしならん、されど今其舊蹟は傳へず」（以下略）との記述がある。

また安能寺の項には「禪宗曹洞派、足立郡大崎村國昌寺末、金鳳山と號す、開山の僧を海雲安禪師と云、境内に墓碑あり」（以下略）と述べている。この墓碑の銘には、嘉暦三年（1328年）と元徳三年（1331年）という年号が記されている。ちなみに、安能寺の南東に位置する安樂寺（創建時期不明）や安福寺も、同じ街道筋に存在している。

風土記稿の安福寺の項には「禪宗曹洞派、安養寺村安能寺の末、開基は名主右衛門が祖先にて、隨山道順と云、元和八年（1622年）卒す、開山金蓮禪師は、元和元年（1615年）化す」との記述があり、江戸時代初期の寺院といえる。その他にも、この街道に沿って数多くの寺院や神社が認められるが、個々に検討するだけの紙幅が無い。風土記稿の安能寺に関する記載から、この寺院の創建は鎌倉時代であることがわかる。山門の位置が変更されていない限りにおいて、山門が面しているこの街道は、創建時には存在していたことになる。地形図をみるとこの街道は、元荒川に沿うように展開する台地や、自然堤防の縁辺を南東から北西に走り、安能寺を過ぎた地点で屈曲し、元荒川から遠ざかるようにして北上する。今回検出された屋敷地は、この街道に面した江戸中期～後期には存在していた屋敷の跡であり、北面する街



第44图 中近世遺構分布图

道の方位に因っていると推測される。また、単独ではなく複数の家屋が存在した地域であったと推測される。

引用・参考文献

- 赤石光資 1978 『薬師耕地前遺跡』上尾市文化財報告第4集 上尾市教育委員会
- 新屋雅明・福田聖 1999 『上ノ宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第252集
- 大谷 徹 1998 『小村田西ノ小村田ノ関東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第229集
- 奥村恭史・秦野昌明 1989 『中里前原北遺跡・上太寺遺跡』与野市文化財調査報告書第13集 与野市教育委員会
- 小倉 均 1987 『井沼方遺跡(第8次)発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第59集
- 小倉 均・柳田博之 2004 『井沼方遺跡(第12次)発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第185集
- 柿沼幹夫 1996 『大きな方形周溝墓出土の超大壺』『埼玉の考古学Ⅱ』pp.261～284 埼玉考古学会
- 桐生直彦 1986 『和田・百草遺跡群』多摩市文化財調査報告10 多摩都市計画部道路事業1・3・1号線周辺遺跡調査会
- 劍持和夫 1995 『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第148集
- 江南町 1995 『江南町史資料編Ⅰ 考古』
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史』資料編Ⅰ 考古編
- 鴻巣市 2000 『鴻巣市史』通史編Ⅰ 原始・古代・中世
- 小島清一 1991 『南原遺跡V』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第3集
- 小島清一 1996 『南原遺跡VI』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第5集
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 笹森紀巳子 1988 『篠山遺跡』『中里遺跡・篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊4 大宮市遺跡調査会
- 笹森健一 1984 『埋蔵文化財の調査(VI)』郷土史料第30集 上福岡市教育委員会
- 堀野 博 1972 『南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告V
- 高橋俊男 1982 『袋・台遺跡』吹上町埋蔵文化財調査報告書
- 立花 実 1996 『方形周溝墓』出土の土器 南関東①神奈川県①関東の方形周溝墓』pp.179～208 同成社
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
- 橋本 勉 1999 『戸崎前Ⅱノ薬師堂根Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集
- 橋本 勉 2001 『向原遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集
- 福田 聖 2007 a 『3. 古墳時代について』『久台遺跡Ⅲ』pp.324～327 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集
- 福田 聖 2007 b 『方形周溝墓における土器使用と群構成』『原始・古代日本の祭祀』pp.148～188 同成社
- 福田 聖 2007 c 『井沼方遺跡における土器配置と群構成』『埼玉の弥生時代』pp.379～396 埼玉弥生土器観会
- 福田 聖 2009 『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集
- 宮高秀夫 1995 『銅剣・鉄剣出土の方形周溝墓 観音寺遺跡第4号方形周溝墓』『比企丘陵剣削刊号』pp.75～85 比企丘陵文化研究会
- 柳田敏司 1979 『観山古墳・観山遺跡』上尾市文化財調査報告第6集
- 山崎 武 1981 『生出家遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集
- 山崎 武 1987 『鴻巣市遺跡群Ⅱ 生出家遺跡群(A地点)』鴻巣市文化財報告第2集
- 山崎 武 1994 『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生出家遺跡群(D・E地点)』鴻巣市文化財報告第3集
- 山田尚友・近藤行仁・岩井昭子 1996 『大久保家片町遺跡発掘調査報告書(第8地点)』浦和市遺跡調査会報告書第205集